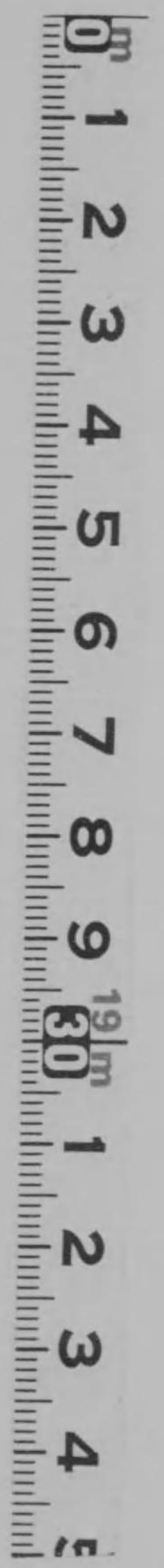


356
169



始



356-167

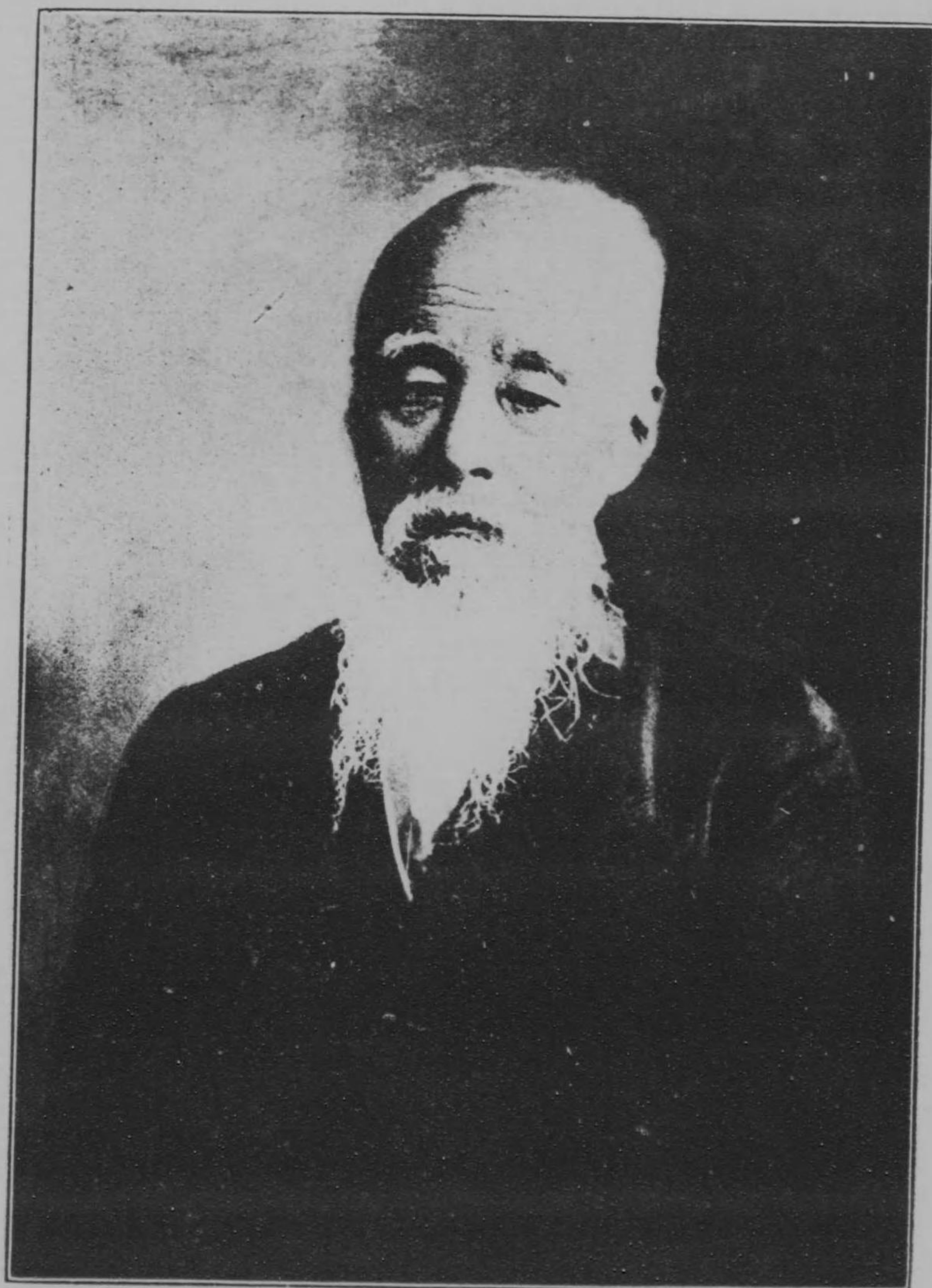


三島中洲先生著

老子講義

明治出版協會





翁 毅 島 三 士 博 學 文

「翁の起居」

宮中顧問官従三位勳二等 文學博士 三

島

毅

齡八十有六

一 大正四年は舊曆の八十六歳に躋る。

二 平生は臺所より拵へ出すものを食し、一宵の不足を申したることなし、壯年の時は晩の例杯一合位なれども、七十以後は葡萄酒を一盞飲むのみ。

三 何にても食し、好ききらひなし、唯多食せざるのみ。

四 朝は六時に起き、夜は九時に寝に就く、一日も違へることなし。

五 幼年より虚弱の質に付、他の強壯者の眞似は出来ずと用心し、暴食暴飲は勿論、何事も過度の事は控へて爲さず、然れども終日讀書又は執筆喫煙の外、一刻も休息したることなれども、平生風邪の外名のある疾に罹りたることなし、唯だ六十五の歳越後に遊歴し、朝夕酒を強ひられ、其の爲か、中風を發し半身不随となれども、數十日にして快復し、其の後十七八年も延命せり、又癩麻質斯が折々起れども、毎夏温泉に坐する故に大患に至らず、七十後は左の座右の銘を作り、自ら戒めり。

長眠少食、多働寡思、更遠閑閑、老後良規。

此の外に何の術もなし。

無為而



看道

二十六日

例 言

一、中洲夫子の老子を講義せらるるや平明を極む、而かも微に入り細を穿ち人をして玄を鉤り願を探さずんば已まず。古來幾多の講義書の世に行はるるありと雖も蓋し斯の如く委曲親切を盡し以て老子の神髓を發揮したるは稀なり。これ不肖等敢て、本書の世に普及せん事を希望して已まざる所以なり。

一、本書は明治四十四年秋より翌四十五年春へ亘り、二松學舎講堂に於て特に高等科生の懇請により講義せられたるを、余が筆記せるもの、但第二十一章の末節と第七十二、三、四、五章とは同講座に列したる友人恒川泰君の筆記により補足を加へたり。

一、本書本文の次に一段宛下げて記入せる、主意、按文、考異は總

て中洲夫子が考槃の餘自ら綴り置かれ、以て講義の資材とされたる老子私録を適宜取捨し、且つ分段して挿入せるもの、講義と相俟つて讀者をして統宗會極せしむるの便に供せんが爲めとの婆心に外ならず。句讀訓點等は余自らが付せるもの、誤あらば追つて之を訂正す可し。

一、本書の文体は可成、中洲夫子の講義せられたる其儘の口調を取り、以て讀者をして親しく夫子の溫容慈言に接するの思ひあらしめんとしたり。されど時に誤記遺漏等なきを保せず、責は總て不肖にあり。望むらくは不文の故を以て累を夫子に及ぼす事をからんを。

三島中洲生先門人

大正四年九月

外狩雅章識

弁 首

正確なる意義よりせば、支那に於て哲學と言へば、獨り荆楚の老莊哲學を擧げ得可きのみ。而して老子道德經は實に荆楚哲學の祖老子其人が、直に宇宙人生の大問題に向つて、根本的の解釋を試みんとせし一篇の哲學論たる事、今更吾人の呶々を要せざる所なり。宇宙の原理は一草の陰にも潜み、道は稊稗の間にも存す、一理の貫通は臆て顯微一体にして、老子は即ち一理の發展を以て天地人生を説明し重ねて之を人間の道德に應用せんとせり。

誠に斯の如きは、支那思想界に於ける空前絶後の一大異彩と謂はずんばならず、而も之を全く正反對なる儒教が、宇宙人生の何

物たるを措いて問はず。唯古來一定せる人間生活上盡す可き一種の約束的道德を以て恰も自然の大法なる如くに思惟し、信仰し敢て自然と人爲とを一貫する原理を發見して人間の行儀を之に由つて割り出さんとせざりしに比すれば、恰も天地懸隔の感なき能はず。且や我國の儒家者流が、支那三千年の文教を獨り儒教にのみ限り、君臣の義・父子の道・處世の要之を他に見出す可らずとせしは一面に於ては正直甚だ喜ぶ可き現象なるも、亦一面に於ては固陋偏狹の嘲を免れ難きに似たり。……孔子已に老子の學を知らず……今日に於て彼此相論するは、蓋し論ずる者の自ら愚の骨頂たるを知らざるに由る可けん。

开は暫く措き、世に老子を讀む者をして、往々其文の簡約素朴

—(2)—

なるに關はず意味深長なるが故に、遂に其の奥底を極め難しとの嘆を發せしむ。是れ即ち從來既に幾多同類の講義書あるを排し敢て本講義を公にするに至れる所以に外ならず。希くは讀者余が微衷の存する所を諒し給へ。

大正四年九月 日

著 者 識

—(3)—

老子講義目次

上編

總論	一
第一章	六
第二章	一五
第三章	二
第四章	二六
第五章	三
第六章	三六
第七章	三八
第八章	四一

第九章	四
第十章	四七
第十一章	五三
第十二章	五四
第十三章	五六
第十四章	六一
第十五章	六六
第十六章	七一
第十七章	七六
第十八章	八一
第十九章	八四
第二十章	八七
第二十一章	九三

第二十二章	九五
第二十三章	九九
第二十四章	一〇三
第二十五章	一〇六
第二十六章	一〇
第二十七章	一三
第二十八章	二八
第二十九章	三三
第三十章	三六
第三十一章	三〇
第三十二章	三四
第三十三章	三八
第三十四章	四二

第三十五章.....一四四

第三十六章.....一四七

第三十七章.....一五一

第三十八章.....一五五

下 編

第三十九章.....一六

第四十章.....一七〇

第四十一章.....一七三

第四十二章.....一七六

第四十三章.....一八一

第四十四章.....一八三

第四十五章.....一八六

第四十六章.....一八八

第四十七章.....一九一

第四十八章.....一九四

第四十九章.....一九六

第五十章.....一九九

第五十一章.....二〇四

第五十二章.....二〇七

第五十三章.....二一一

第五十四章.....二一六

第五十五章.....二二〇

第五十六章.....二二四

第五十七章.....二二六

第五十八章.....二三〇

第五十九章.....二三四

第六十章.....二三七

第六十一章.....二四〇

第六十二章.....二四三

第六十三章.....二四六

第六十四章.....二五〇

第六十五章.....二五五

第六十六章.....二五九

第六十七章.....二六三

第六十八章.....二六九

第六十九章.....二七一

第七十章.....二七四

第七十一章.....二七七

第七十二章.....二八一

第七十三章.....二八七

第七十四章.....二八四

第七十五章.....二八七

第七十六章.....二八九

第七十七章.....二九一

第七十八章.....二九四

第七十九章.....二九七

第八十章.....三〇〇

第八十一章.....三〇三

老子講義

文學博士 三島 毅述

老子道德經

總

論

按我聖人，就人間說道，故實着實着，故易拘泥。老莊離人間說道，故空妙空妙，故易橫恣。又按老子之道，虛無自然而已，自然故虛無，虛無故自然，異名同旨。又按老之自然與儒之天，異名同旨。孟子曰：無爲而爲者，是天也。

論

總

上編 按上編專論道

解説

老子と云ふ人は一體能く分らない人で、前漢の太史公でさへしかと知る事が出来なんだ。

然し孔子禮を老子に問ふとあれば孔子時代の人であつたかとも思はれる。又非常に長生をしたと云ふ事だが其れも捕へ所が無いから信ずる譯にはゆかぬ。何れも想像で諸説紛々と云つた様子、書を讀むと道は高い事も言ふてあるが又低い事も言ふてある。書の様子から考へると周の世が亂れて戰國時代の事を知つて居た人らしい所もあるので、すると孔子時代より以後の人かも知れない。

其處で此れは疑問だ、考證して時代の古いか新しいかをしらべ、色々得失を言ふと至つて長い話である。其れを調べるとは考證を

するが好いけれども其れは老子の道を學ぶには何にもならぬ、只詮索自慢をするに過ぎぬ。眞實、正味の、益と云ふは、無い、何ん、ても、正味を會得せねばならぬ、實行するつもりで讀まねばならぬ。自分に若しも出来ない事が言ふて有つたらそれは無用な事だ。老子は人の爲めに作つたので人に出来ない様な事は言ふてない。

始めは文字より入らねばならぬが實行されるや否やを味ふが第一だ。すれば書物の有難味がわかる、扱て學問には色々派があつて老子、佛家、陽明、朱子、皆それ、長所がある、老子は特に、天地と云ふ事を詳しく説いて居る、愈本文に入るに及んで追々と解つて來るであらうが全體老子は此の青々として際限のない天地は虛無自然の道から生じたと云ふ。無有無々て虛無と云ふ何にも無い所から有になつたのだから又無に還ると云ふ、無になつたかと思ふは有、有かと思ふは無。朱子學では先づ天地を有無の兩極に分ち、そして太極

即ち一元氣と云ふ何か動かぬ中心となるものがある様に説くが動かぬ物は死んだ物其れを天地生々の一元氣とするのは必定老子の太極の意味を間違へて取つたのだらう。

先づ理義の二方面から云へば朱子は昔から一種の定つた理があつて萬の生を使つてゐる様に云ふが老子、楊子、孔子、孟子等何れも生々として生きてゐて天地の萬物を司配してゐるものを太極と思つてゐる。て無から有、有から無と獨り手に轉々反覆して萬物が出来ると云ふのが老子の説く道と云ふものだ。丁度朱子とは正反對で例へば朱子が云ふのは五倫の道があつて人間が出来たと云ふと同じで決してそんな事はない、人間があつて始めて五倫の道が生じて來ると云ふのが正しい。即ち茶碗があつて始めて飲むと云ふことがあると同じ理けだ。とまあ云ふ。さて此の位にして置いて本文に這入ろうかな。又聖人は世の中で着實に道を説いて親に孝、君に忠

と教へてゐるが然し其の忠なり孝なりに拘はると好くない、只自然の已むを得ざるに爲せと云ふ即ち其れが老子の徳とするところてそれは本文に入ると分る。

處て道と徳とを兼ね説いてあるから老子、道、徳、經、と名をつけた道は天地の先、自然によつて出來た、自然と云ふものは天地が持つてくれば天地の物、日月の運行四時の順序を立て、ゆくのを天地の大徳と云ふ其れを人が得て心の徳とすればそれ即ち人の徳となる、道と云へば廣く大きく使はれる、丁度大きな川を流れる水の様なものだ家にとり入れ手桶なり水盤に入れてしまつたの徳と云ふ、そこで老子の上篇では廣く一般の道を説き、下篇には専ら徳を説いてある。

第一章 說道之根源虛無

道可道非常道，名可名非常名。

第一節

按有道斯有名，道與名一耳。故下句不承道而承名，又按局干一事一形，與他事形不通，不通則不得不變，變則異，是非常久之道。又按可道若仁義禮智之道，可名若仁義禮智之名，既有此道有此名，彼此相異，彼此相變，非常久不異不變之真道也。

無名天地之始，有名萬物之母。

按有名言有天地之名，母一字喻謂本也。

故常無欲以觀其妙，常有欲以觀其微。

第二節 就人說道

故常無欲以觀其妙云々。按始無而終有，有復歸無，無有始終循環無端。又按人觀始終，知道之全無，又按其字指道，妙者生之始，微者死之終。筆乘曰：微如邊微之微，言物之所盡也。又按常無欲猶兒之在胎，何欲之有，既生素乳而泣，其欲生於微妙恍惚之間，是自然之道也。

此兩者同出而異名，同謂之玄，玄之又玄，衆妙之門。

第三節 繳還道源

筆乘曰。無之爲無不待言己。方其有欲之時人皆執以爲有。然有欲必有盡及其盡也極而無更往必復歸于無。斯與妙何以異哉。故曰此兩者同謂之玄。

講義

私は書を講ずる時には必ず段落を分明にする。そこで老子の書で一章と云ふものは平生云ふ一段落に當るもので其中を又一節に分けて云ふのが平生云ふ一小段に當るのだ。すべて人の言葉には切りがなくてはならぬ。必ず段落がついてゐる。是れを覺へてゐると自分が書を読むにも文を作るにも又話をするにも道統が正しくついてよくわかる。そこで一章の主意は道と云ふものは無の者でないのもだと云ふ。道の根源即ち虚無を云ふ、それから道可道非

常道、名可名非常名、無名天地始、有名萬物之母、が第一節で道の本を云ふて、二節から變てくる。道可道非常道、今日の學者が云ふ道は一體、それがきまつて道とせらるゝものは即其はいつも變らん道ではんとの道ではない。と常住に道とす可きものが無いと云ふ事を第一に擧げて拘泥の見を破つて置く名可名非常名、道があると名がつく、これは一つ事を延して云ふただけであつて、それが口で名のつけられる様なものは常名ではない、高いことを云ふから低く下げて云はねばわからぬ。儒者の道には名教がある、君義親孝父慈子孝兄愛弟敬のこれらを破らうと云ふのだ。例へば仁の仁とす可く名を作つて仁にばかり拘はると、ヒョットして仁と云ふてねられない場合がある、殺さねばならぬ仕誼となる不仁をせねばならぬ、其の仁を常住のものに云ふてくると、なす可き方法の千變萬化を見出ださないで、遂に宋讓の仁の笑ひを受ける様にもなる。きちんと道と云ふ

て名が定まつてゐるとそれは常の道でない、そこで名をつけな
 よい。なんにもない道も名もなんにもない、そうすると自由自在、其
 の時々、義忠孝と場合に、のぞみ變化して道が出てくる、一寸見聞き
 しただけでは、儒教の仁義忠孝を廢する様に覺ゆるが、仁を失へ、忠を
 行ふなど云ふのではない、一層それを超越した眞の仁眞の孝をせ
 よ、名に拘はるな、教に執着するな、名數にかゝはるとよろしくない
 云ふまでのこと。道は道路の様なもの、其の道理をこれは京都路
 是れは大坂路、是れは仙臺道ときめると融通がきかぬ事となる、よし
 や鐵道が出来て簡便に速行するからそれに乘ればよいのに、いや是
 が京都路だとてそれを依然として歩いてゐられては大變だ。平常
 の道路に水が出たり山くづれがして歩の出来ない時になると差し
 當り困つて了ふ、しかも尙ほどうしてもかふしても此れが仙臺路だ
 からと是非通らねばならぬとして了つては全く其の害たるや甚だ

しい、兎角實行となると拘泥しやすい、こゝら邊は儒者より一段高い
 見識を以て云つてある。

無名天地之始、有名萬物之母、無名ですぐ道の事を受けて云ふ、名も
 ないものが天地の始め無名より萬物が生じた、日月天地は形が出来
 てから初めて日月天地と名をつける様になる、上は天、下は地と云ふ
 すると又天地の間に山川草木禽獸虫魚が生成してくる、即ち天地即
 ち有名が萬物を造らへた、母から天地、又其の天地から色々物が出
 来る事を云ふのだ。道の根源を云ふて天地が萬物を生む事を云
 ふた、それで無ばかりでなく無からヒヨット生れて来た、生れてきた
 から居るばかりではなく又ヒヨット無くなる、有は無と轉々反覆す
 るものだ、と云ふことを皆さんの頭に堅く入れて置かねばならぬ。

第二節 故常無欲以觀其妙、サ、そこで前の様な大きな事を云ふてゐ
 ては一寸解りにくいから第二節では人間だけの上に就いて道を説

いてくる。すると道の無と云ふことがわかる。先づ常不斷の欲と云ふものを全然無にして見ると道の妙が見へる。妙は見へる、か見へないかの絶景を云ふ。ハッキリ見へては面白くない、書ききても上手となのと下手なのとを比較して見ると同じ題書でも何處かに妙所のひそむとひそまないのがわかると同様に常無欲であれば道の妙は自らかみしめられる。生れた以上は欲がある、しかし小供が胎内に居るときに歸つて見ると道の工合がよくわかる。ヌツト生れる乳がほしくて泣く、寒くてなく、母を慕ふて泣く、色々自ら欲が出てくる、無いところから自然に欲が出てこずにはおられぬ。

其れが道だと。親の乳を呑んでゐるそれが道で自然の道理に従ふてゐる。老子は専ら虚無を説き、莊子は自然を説いた。朱子は老莊孔孟合せて説いた。莊子の方では、やむを得ざるに於てなすと説いてある。とにかく自然にセツバ詰つて事に當り爲すまゝにする

その時々には道が出てくる、所に道の妙が見へる。常有欲以觀其微、生れた以上は常に欲がある。ところが千年萬年天地と共に欲があると思ふと大きな違ひ、必ず欲のちがひが見へる、微は邊境で國べたてしまひと云ふ事、死せば大欲も頓に消す、これが欲の終るところ無に入るのだ。無に歸つたらそれがしまひだ。ツマリ欲を働かして居つても長くいつまでも續かぬ事がわかる、又元の赤ン坊になる。

人間の上に見ても其の通り殊の外高い所を言ふて居るが是れを人々の平生に合せて見ると書の味が知れる、只お慰みに書いたでもなく又おなぐさみに讀むてはならぬ、又自然の欲は欲と名づく可きでなくそれが自然の道だ衣食住などは人にとつては一日もなくてはならぬ故に働いて得ねばならぬ、その働くは人の道、自然の道。其れを自分が過して人を犯し他をむさぼる様になると其は眞の欲だけれども其も終には無くなる。此兩者同出而異名同謂之玄、玄之又

玄、衆妙之門。又初めの元へ歸つた、中節で人に落して云ふたが又もどつて了つた、此兩者とは妙と微とを云ふ。二つの者は同出て同じく出會ふて妙の無いものと微の無いものと出會ふとやはり無いのて同じ無てある名だけが變つてある丈け眞の同じいのは無いのが同じいので同じいものなれば方便上之れをかりに名をつけて玄とするより外に仕方がない、玄は黒く奥深い事を云ふ、大空の際限なきが如し又玄之又玄、又玄を探り求めて見様としても玄は、更に、玄、て底が立たない、絶對無限だ、奥深いものは是れておしまひかと思ふと又それから萬物が發生する故に衆妙之門と云ふ眞の奥深いところが衆妙の出る門口である、無いきりては終らない、是れが自然の道、有つたり無つたり始終働き廻つて變化無盡。一元氣を宇宙と云ふ太極のことだ生きてゐる、其の邊は佛説とよく似てゐる、佛家は是の理を、あめ、あられ、ゆき、や、氷、と、へだつれ、と、とくれば、おなじ、谷川の

水と云ふて氷と水とに由つて説いて居る色、即是空、空即是色、とも又云ふてゐる。

第二章 主意說聖人處無爲

天下皆知美之爲美、斯惡己。皆知善之爲善、斯不善己。故有無相生、難易相成、長短相較、高下相傾、音聲相和、前後相隨

第一節 言有之非道

呂記。天下皆知美之爲美、善之爲善、而欲之、知惡與不善而惡之。然自離道言之、則雖美與善皆離于道矣、自出于道而言之、則雖惡與不善皆非道之外也、由此觀

之。則美斯惡善斯不善豈虛言哉。按美惡善不善對待也。至美至善是絕對也。絕待是道。對待非道也。又按陽明以無善無惡爲至善。以無憂無樂爲至樂。蓋本于此理。又按無既生有則善惡以下兩兩相形。然其本皆出于無。同耳一耳。何曾有善惡以下兩兩相形。又按落形以下兩兩必相形。

是以聖人處無爲之事。行不言之教。萬物作焉而不辭。生而不有。爲而不恃。功成而弗居。天唯弗居。是以不去。

第二節 言聖人無爲

按爲則偏于一。爲不若無爲之事廣大。言則偏于一言。

不若不言之教廣大。皆任自然而已。自然即絕對之道。非形以下對待之事。按子曰。天何言哉。又曰。吾欲無言。孟子曰。難言。佛曰。吾四十九年住世。未曾說一字。蓋玄妙之道。非言語之所盡。諸道皆然。今日教師辯論如流。而躬行不修。生徒不從其教。言論雖訥。躬行能修。則生徒必從其教。亦可以知不言之教之妙。按萬物以下皆聖人之治天下。爲而不爲之事。譬如天下大亂。萬民陷塗炭。萬民作興。推我爲君。則我不辭。撥亂反正。既反正。萬民安正。而不爲己私有。又營爲治之。而不恃才能。治安功成。而不居其功。自不居其功。萬民稱其功名。而不己功名。永不去其身是也。

講 義

第二章は聖人は虚無の道理に本づいて天下を治めるのだと云ふ天下皆知美之爲美斯惡己天下の人何れも花なら花と云ふものの美しい事は誰れも知つてゐる。しかし其はそうでない却つて見悪くいものだと云ふ。善の善たる道理は誰れも知つてゐる。然しそれは眞實ではない。却つて不善だ不道理だと云ふ。即ちそれが眞實だ。善と云ひ美と云ふからは相手には必ず惡醜があるに定つてゐる。

莊子の齊物論を見ると能く此の事がわかる、相對すると是非善惡得失が出来る、それは眞の道ではない、故有無相生。難易相成。長短相較。高下相傾。音聲相和。前後相隨。絶對と對待、第一義と第二義を論ずるのだ。美と云へば惡、是と云へば非と云ふ風には是非善惡有無得失優劣賢愚長短廣狹と相待あるものが出てきて止む時がない。

い。又音聲は音で音はカラ違つてゐるものだ、遠ふものが出會ふのを和すると云ふ。一つは高い一つは低い。て對待になる、それが和せなければならんと云ふ道理が出てくる、それはどこまでいつても際限がない。形ある以上はわかれて来る。其の多くわかれてくる中であれが道だ、イヤ是れが道だとするとまらひが出てくる。

それで虚無が大事だと云ふ。

第二節。其の道理を知つて聖人は無爲になる虚無を守る、スルナシと云ふ場合に居て事をする。しないのをすると云ふ事、心あつてするのはない、又不言の教を行ふて道を廣く人に感じさせる物の極りは何んでも絶對無言だ。不言の所てなければホントの事にはいかぬ口であれこれ云ふ様では未だ眞實でない。釋迦は四十九年我れ且つて一字を説かずと云ふた。孟子は浩然の氣の如き高尙の事を説く時には吾是れを知らずと云ふた。學校の先生がいくら才

辯があつても平生の教が道に會ふて立派でなければ如何程口辯を費やすとも生徒は感銘するものではない。それよりは口辯拙くとも行狀よろしき人の云ふ事は殊の外感じ入るものでそれ等の人になると實に不言の教を垂れてゐるので、口で言ふよりも一層にひろく深く大きく道を傳ふる事が出来る。不言の教、不言の行、ひに達せなければほんとならない、萬物がふるひ起つても一向に辭退はせぬ、それと一しよにする例へば暴君が出て人民は塗炭の苦をなむる時衆庶が聖徳の人をもち上げてくるそれが萬物起るて聖の人はやむなく政をする。

政は整ふ。すると萬物生き返つて安心する、けれ共私がしたのだとはしない又政をなして己が才や智や徳やを誇り恃みにはせぬ。一向に無頓着だ謙讓して退けて了ふ、否退げるのではない一寸も心にかけないのだ其の功の上に居らずに自分が退げると却つて功が

追つてくるものだ。鼻がたかいと人が何にくそと反感を起すものだが功を恃まず氣を下してゐると反つて求めぬ、令聞が他よりやつてくるものだと云ふ。

第三章 主意言聖人使民無知無欲

不尙賢使民不爭。不貴難得之貨使民不爲盜。
不見可欲使民心不亂。

第一節 泛說下從上之理以起下節。

按尙貴皆謂不自然使心考異古本作使民心。

是以聖人虛其心。實其腹。弱其志。強其骨。

第二節 言聖人無知無欲以修己

聖人又按腹骨皆喻無知四其字指無欲。

常使民無知無欲使夫知者不敢爲也爲無爲則無不治。

第三節 言聖人治人使無知無欲

無知無欲按人身生物豈能無知無欲自然而知自然而欲不用私知私欲謂之無知無欲猶言無爲而有爲耳。

則無不治按治字繳還聖人之治

講 義

三章の主意は聖人の天下を治むるは人民をして無知無欲のところに飯せしめて了ふと云ふことを言ふ。第一節で下の方の者は上のまねをすると云ふことを前に言ふて置く。これが此の章の主意ではない。是れを云ふて置いて後から主意を曳き出す先づ第一に諸子の書には甚言のある事を知らねばならぬ。普通のことを書き普通の詞を使つて居たら人に響かない。だから力めて激烈に云ふ此の甚言がないのは論語だ稱して圓熟教と云ふも道理ある事である。

さて此の甚言につかまると大變なあやまちを生ずるものとなる諸子には老莊に限らず此の弊がある。此の第一節は一寸言ひすぎてゐる。老子はすべての事に特に意を用ひて尊ぶを嫌ふ。賢者があれば賢者とするだけで別に愛せぬがよい。愛すれば民が競ふて賢者

のまねをする様になる。弊害がついてまはる。偏尊すると云ふ事はしないがよい。手に入らぬと云ふ貨がある、之れを老子はきらふではないが自然に得らるれば得るのだが其れてないと借金をして迄も求め様と云ふ風になる、其の物にこりが来る。上の方でする事は下の方では自づと之れ見まねをする、上の愛するところを見て下は之れをおさめてどうかして上の氣に入らうと企てる様になる。欲す可きを見せるは大毒だ見せると云ふと民心をしてそれに自づと走らせる様になる。上の愛を求めんとする様になる。只心字の上に民と云ふ字を入れて見るとよくわかる、古本には民心とある其の方が善い様である。

此處で聖人の治め方へとおとして来る。聖人が自分と無欲にならねばあらぬ、自分が先づ無知無欲にならなければ下が治まらぬ。之治の二字が古本にはない、それは無い方がよいと思ふ、聖人之治と

云ふと何だか聖人之治と云ふ別物がありそうだ。其の聖人の心のあり様と云ふので之治と云ふ方法ではない、故に聖人は一番に其の心を何も無い様に空虚にしてそして腹を一杯にしてゐる是れは例で、人の思ひは虚のところにあると云ふ所から、

昔しは心臓で物を思ふと云ふた、ムネのすいた所だから虚をむねとよむ、そしてむねより下の腹は食物を入れるところで物を思ふところではない。だからこゝは充てしむるがよい、下腹同様に胸一杯にしておいてはならぬ。思ふと云ふは知恵をめぐらすこと、すると欲が充滿する、だから思ふところは虚に、思はぬ所は充てた方がよい。志がある、と何んでも剛情に貫かんとする様になる。又骨は思はずもの、是れは堅くかためておいても知の邪魔にはならぬ。志は是非とも弱くして我れと思はぬがよい。と云ふことは無思無欲無知にあれ。自然に向ふからなる様に爲させたがよい。と申す事此の通

りにして自分を修めてさて第三節で聖人が人を治めることを云ふ。上のすることは下之れに習ふと云へてとす、民をして無知無欲ならしむるが主意だ。彼の知者をして知恵をあれこれと使ふものを無爲無欲にさせるには聖人が上に立つて無爲自然を修むれば下方は自らそうなる。ならんと云ふことはない。私知私慾をなくすると公平之知が出てくる、私の知はどうも自分の勝手がよくない、其の私知私慾を無にすれば、自然の善い知恵善い欲が出てくる、此れが自然の眞の道だ、老子が無知無欲になれと教へるのを一寸聞くと人を木石になれと強ふる標に受取られるがそれは表面の字面を見た丈けの處で眞の義はそんな物ではない。すべて眞義を知らねばなんにもならぬ。

第四章 主意言道虚而爲用

道冲而用之或不盈淵兮似萬物之宗

第一節 說道体

道冲而用之云々翼註、冲本作盅器之虚也。蘇註、夫道冲然至無耳。然以之適衆有、雖天地之大、山河之廣、無所不遍。以其無形故似不盈者、淵兮深渺、吾知其爲萬物宗也。

挫其銳解其紛和其光同其塵湛兮似或存

第二節 說道用

「挫其銳解其紛云々」邵辨曰、銳者所以爭挫其銳則解紛矣。光者所以辨和其光則同塵矣。上二其字、以已言、

下二其字以人言考異紛碑本作忿
吾不知誰之子象帝之先

第三節 復歸道體

「象帝之先」翼註象似也按帝天帝也老子之道無天帝
蓋借世俗之言耳。

講義

四章では此の虚なるものが多くの用をなす事夥だしいと云ことを説く。第一節では道の形はどんなものかを先づ云ふ老莊の學では先づ物の體と用と云ふを知らねばならぬこゝは體を云ふ體があるから動く之れが用道は沖てひなしく古本には沖字を虚としてあつた皿の中には何んにもないとは字の意此のないもの虚なるもの

を用ゆる、よゝい分別も亦悪い分別も湧いてくる其の様を見れば不盈て心に道が充ちてゐるとは思はれない然し水の淵の如く奥深く澄んで床しい所が如何にも此の世の萬事萬物の大本家にも似てゐる似て居るのではない即ち虚が宇宙の根源で此の天地には虚から出てた道が満遍なく渡つてゐるこれが萬物の宗だ。

見んとして見へずきかんとしてきかれず此れが道の體で空虚なものである。第二節 鋭はするどいこと尖つてゐること紛は亂れる、亂れたならば解いて收めねばならぬ其の鋭の其字は自分の心を指す下の其紛の其字は紛雜してゐるものを云ふ其等を收め修め様とすると其の時に自分の鋭い氣を以て修めて了ばんとするとまますまみだれるばかり喧嘩の中へはいり仲裁せんとする其の時堅く出るとどぎに拳を固める。サアそうなると大喧嘩になつて了ふ。故に其ふ云時には鋭氣を持たず圓るくなつて出ないと收さまらな

い其の紛がとけない、それから光は物があると光る、其れが彼方へ當る様では善くない己れの光を和げ下つて塵の中へ同ふしてゆかねばならぬ、知や才や徳やなどの光をさらさらさせると人がにげてゆく、人間に一しよにしてくれない、折角人の中にある甲斐がない。だから塵と共にをり人に交はらないでは仕事が出来ない。馬鹿になつた様だが其の中に自ら湛兮としづかに何物か存してゐる様に見える。此等が孔子などが云はれた事と同じ意味で人に交り塵に同ふしてゐるが彼れの塵と全く同一になつて了ふとよくない然し乍ら人は何か一つどうしても一所になれないと云ふものを存して置かねばならぬ一頭地をぬいたある物がなくてはならぬ。今日でも和光同塵と云ふ、言葉に執着すると厭世主義を起す。同塵の方便に道を持してゐる様でなければ眞に老子を學んだ者とは云はれな

第三節 又此て道の體へもどる。よく文法が備へてゐる、體はかくの如く靜であるが世の中へ出せば非常に用をなす、誰れが生んだてあらう、誰の子てあらう、帝と云ふは天帝よりも先きの様だ、それは其れに相違ない空なものだから玄之又玄て奥が知れぬ、解らんものと云ふところへ結ぶ。

第五章

主意、言人守虚中則不窮、蓋虚中無心、

無心則從時從物變化無窮、

天。地。不。仁。以。萬。物。爲。芻。狗。

第一節 言天地聖人中虚無情、

「天地不仁以萬物爲芻狗」蘇註。天地無私而聽萬物之

自然故萬物自生自死死非吾虐之生非吾仁之也。譬如結芻以為狗。設之于祭祀。盡飾以奉之。夫豈愛之時適然也。既事而弄之。行者踐之。夫豈惡之時適然也。按不仁即大仁。即善仁。又按為芻狗。謂不介意耳。不可拘祭祀。又按天地偏于生則不能續生。偏于死亦同。不偏于死生則死生循環無窮。即易太極一元氣。不偏于陽不偏于陰之理。但我聖人偏于陽者。己身居于生物之間。勢不得不然。蓋以陽為表。以死為裏也。又按莊子云大仁不仁。蓋謂不私愛一物。即此章意。

天地之間其猶橐籥乎。虛而不屈。動而愈出。

第二節 比喻

其猶橐籥乎。翼註。橐籥治鑄所用致風之器也。橐外之攢所以受籥也。籥內之籥所以鼓橐也。虛而不屈。按天地中虛。故生死萬物而無窮。極即不生不滅。

多言數窮不如守中

第三節 就人事結主意

多言數窮。王註。必窮之數也。翼註。數屢也。按王註。優數理數也。

不如守中。按言不若沈默守中。蓋天地聖人不言守虛中。故不仁或仁。唯從自然。又按中故不偏。仁不仁而常

虚

講 義

虚冲を知つて守つてゐるといつまで道を行ふとも道が用ひ盡されん程ある。有限なものだと際限があるが無限だから絶対だ。甚言の窮うかとのると大きな禍ができる。老子は人が天地を有難ふ思ふてゐるのにそれを不仁だと云ふてけなす、天地も聖人も情がないと云ふ事を力めて云ふてある、此のうらに眞理のかゝやきがあるぞ。天地には偏愛がない萬物同視だ。それを云ふてよく愛さんとする仁はないので天地が萬物を見て吾々をわらで作つた人形の様に見てゐるこの仁心のないのが反つてありがたい、聖人は百姓を治めるがやはりわら人形の様だに思つてゐる、其れが却つて大仁なるを知らねばならぬ、愛さざるを得ないで愛する之れが大仁で、老子は今不仁を云ふて後で大仁と云ふ事を言ふ。自然の仁でなければ差支

が出事ると云ふ第二節 譬を以て説いてある。天地の間をたとへて見るとタ、ラの様だ。タ、ラは箱があつてカンを指して風を出したり入れたりする、タタラは空虚なものだから虚にして屈とつまらぬ、まらぬ、まらぬ、まらぬ、限りがない動けば動くばどいよいよ中から風が出る。火もあこり鐵でも銅でも自由にとかす事が出来る。此れ程の用をなのはたゝらが空虚なからだ、無心だから此の様になる。

第三節 一寸之れを人に落して虚でなければぬと云ふ。

多言なれば數窮す、數は理に於て二を合れば四、四を合れば八と定つて出てくる、つまり多辯するとクズやあかが出て屈窮とつまる様になる、それより饒舌らずに黙して言はぬがよい、中は偏らぬ、やはり虚の事だ。不言の教、言はざるを得んとする時に言ふとよくきかされる。何んでも多辯て言ひまくらんとするとどつこい言葉の尾をつかまれる。よくよく心す可き事だ、故に仁にも不仁にも偏つ

てはならぬ、此が天地の道で又善仁だ、大きな道である。

第六章 主意言道虚而神用之不勞

谷神不死。是謂玄牝。玄牝之門。是謂天地根。綿々若存用之不勤。

谷神不死是謂玄牝。蘇註。谷虚而無形尙無有生安有死耶。謂之谷神。謂其德也。謂之玄牝。言其功也。牝生萬物而謂之玄。言見其生之而不見其所以生也。翼註。谷喻也。按。谷神猶言虚而神。勿拘。谷字牝亦喻也。

玄牝之門是謂天地之根。按。言天地萬物自玄牝而生。蘇註。門直指玄牝得文理。

綿々若存。按。其神微而不絶。存于天地萬物之中。名之曰自然。又按。神即道也。自然也。異詞同旨。

講 義

道は虚なものが誠に神の如く不思議なもので其の道を萬物が用以然かもいくら用ゆるとも更に疲れると云ふ事がない、それか誠に神妙なものだと云ふ、一節では道の體を云ふ、谷神、老子には一字の譬が多くある、谷も其の一字の譬で谷は山の間で虚なるところ、眞の虚なるたとへだ、神は道を申す、其の虚なるところに神か御座る、是れが奇妙な不思議な神だ、死するも始終生きていて働をなす、玄牝、玄は奥深いこと、牝は雌で物を生み出すもの、虚から萬象を生み出すことを斯ふいふ風に云ふのだ、玄牝の門があつて物が出てくる、其れが綿々と綿の出る様に次へ次へと萬物を生じてやまぬ、天地萬物四時の運

行それぞれ道があり又人があれば又人の道が出来てくる、是れ即ち道の本源のする仕事自然の道を萬物がかく用ひてゐるが一寸も疲れない、疲れそうなものだに……勤は勤苦と續く實に不思議なものではないか。

第七章 主意言公即成私即爲

天。長。地。久。天。地。所。以。能。長。且。久。者。以。其。不。自。生。故。能。長。生。

第一節 言天地公而成私

不自生謂與萬物共生也。是自然之道也

是以聖人後其身而其身先外其身而身存非

以其無私耶故能成其私

第二節 言聖人公而成私

按吾儒先天下之憂而憂後天下之樂而樂佛家自利利他皆此意

講義

此の章では道は公なものだと云ふ。表へ打ち出して誰れも彼れも用ふる之れを公と云ふ、自分一人でするを私と云ふ、公にすると却つて自分のためにもなる、と云ふ道理を説く。俗言に、人の爲めは、吾が爲めと云ふが其の通りの事を云ふ第一節 天地は至つて公なものだそれだからやはり其が天地の爲めて且つ私の爲め私が出来ることになる。扱て天長く地久しいわけあひのものは、それは外でない、自ら私に生ぜんとしないから自ら私をしないで公な自然の道に従

ふから、長生するわけ。だから聖人は何事でも自然に法つてするものだ。天地が左様なわけであるから聖人もやはり何でも自分の事を後回しにする、人をあさめ救ふ、公な事をする、人の事を先にすれば人は捨ててはおかぬ、持ち上げて人が必ず先きに立たせて呉れる可きもので身を後にしよふとしても人が後にはおかぬ、自分の身はないものと思ふて人の事ばかりをしても身は存する、人が放つておかぬ聖人は自身の體の如く世を廣く愛する、天地同根、萬物一體の達觀は之れに外ならぬ。

足の疲れを休めば體中がよくなる様なものだ。然し頭から人の事をする、私の爲めになると思つてやると、又違つて了ふ氣をつけねばならぬ事だ。此等の老子の言は儒者の言ふ道德の教と同じ事になるので天下の憂に先つて憂へ天下の樂に後れて樂むと云ふとなじだ、親が子供を連れて花見にゆく、子は花を見てよろこぶ、親は其

の子の喜びを見れば満足するので、花見に氣はないのだ。自分丈けの事をせよふとすると人がきつとさせない。どうしても私の事は出來がたい私等が平生に理氣合一を言ふのも此の邊の消息である次に天長節地久節等の文字は何れも此の章から産み出されたのである。

第八章 主意言聖人從自然而不與物爭

上善若水、水善利萬物而不爭處衆人之所惡故幾於道。

第一節 說道

上善若水「按上善至善也。絶對之善也。非善惡相對之善。下文七善亦謂至善。又按善謂自然。」

故幾於道按上善即無形道也水猶有形故曰幾。

居善地、心善淵、與善仁、言善信、正善治、事善能、
動善時、夫唯不爭故無尤。

第二節 言聖人從道。

居善地云々宏甫註曰居善地七句皆聖人利萬物而
不爭之實按老子非不喜仁唯惡不出于自然也故從
自然施與者謂之善仁。

講義

聖人のする事は丁度水の道理の如くに物と逆ふ事がないと云ふ
事を述べる一節では道は水の様だと云ふ、サア其の上善は兼ねて言
つて置いた通りに善の上善なるものだ、大學にある至善だ丁度水の
様だ水ぐらひ萬物を利するものはない。そうして他と争ふ事をし

ない。物の上にならうとはしない並の人間はひくい處を惡む、水は
人のにくむ所に居る、上へ出様とはしない、それ故に能く道にちかい
自然の道はやはり水の様、萬物を利する。

人はそれだから自然にさへ従つてゆけばよい。次に七つ善を並べ
た。聖人は其の結構なる水の如き自然の道に従つて御座る、聖人は
上善に従ひ淵の如く奥深い處に心を置く。莊子も人間世あたりて
心を虚にする工夫を説いてゐた様だ。與は善仁、是れはまた自然の
仁で、施さねばならぬ時に施す、與へれば又くれる、麥飯で鯉をつる考
は善仁でない、老子の意は此邊にある仁を嫌ふけれども。此の至仁
は大好きだ、言は善信、自然にうそをつかぬ、まちがひのない事、政は善
治、自然に従ふて治める、正は政がよい事は善能、又する事は自然に従
つてするから善能である、動は善時、又時節が來て動くから自然に従
ひ道に合ふてくる時は大切なものだ、時の道理は易を讀めば一層に

能くわかる時と相俟たねば、どんな事でもならぬ、さて何事も上善に従ふてするのだから争ふ様な事は少しもなくて争はぬからだのあらうはずがなく、丁度水の通りてあると申した。

第九章 主意言功成身退是天道

持而盈之不如其已、揣而銳之不可長保

第一節 虚説人爲難長保

持而盈之云々翼註。持而盈之、謂盈而持之也。揣而銳之、謂銳而揣之也。古文多倒語耳。懼溢而左右以枝之。曰持懼其折而節量以治之曰揣。按揣而銳、銳而揣摩物也。又按易曰滿招損。孟子曰進銳者退必疾。亦此意。

金。玉。滿。堂。莫。之。能。守。富。貴。而。驕。自。遺。其。咎。功。遂。身。退。天。之。道。

第二節 實説人爲難長保不若退身自全

富貴而驕按論語曰富貴而驕亦此意。

功遂身退天之道攷正切遂身退今本作功成名遂身退按天道謂陰陽消長之理

講 義

此章では専ら何時までも功名を持つておろうとするは間違ひでよいかげんに見切を付け引き去らねばならぬ一人ていつまでも功名を固守するは天の道に逆むくものだ、と云ふ事をのべる。

一節は人間業とする事は長持はしないと云ふ、持而盈之は倒句で盈而持之とするが好い水なら水をみたして持つ事、いつまでも持つてゐる事は出来ぬ、人間業だからだ、それよりもむしろ、そんな馬鹿な事はやめるがよいと云ふのはつまり勤てする事を廢斥する意味。揣而銳之、此れも倒句で尖つた物の先きを以て重箱の隅をつゝく様に隅をはかる事を云ふ。手の届かぬ所をすりつけてはからうとすると、それはよいが肝要の先きが折れて了ふ、人て尖らしてしたので、だから長持はしない。だから人間でなした事は長持はしない。

二節、金玉堂に満る大財産もいつまでもとは期する事が出来ない、富貴而驕、貧乏なものを見るとぶる、其れはよいが、其のたかぶつた反動として人は決して随つては來ぬ、それで必ず終ひには悔なり又は罪なりを後へのかすたとへば自ら身代をつぶさんても、子の代には失はれる様なものだ。

だから富貴にしてもどごりたかぶる事をせぬが安全でよい、サテ功成り名遂げて而かも其の功名をいつまでも固守せんとする、といつか垢が出てくる、却つて後へ汚名を残す、とかくいつまでもと云ふ事は出来ない、潔く退くのが天の道だ、寒暑の回轉の如く寒極つて暑生ずるで自分一人てと云ふ事はよくない、出来ない相談だ、だから天道に従ふてゆかねばならぬ。

第十章 主意言玄德

載營魄抱一能無離乎
專氣致柔能嬰兒乎
滌除玄覽能無疵乎
愛民治國能無知乎
天門開闔能爲雌乎
明白四達能無爲乎

第一節 列舉守玄德之工夫以起下節

載營魄抱一能無離乎白虎通營營不定貌按言人乘營々之体魄而能守一神不變不離又按心不在焉視而不見是離一也又按無疵不傷神也

能無知乎按言從自然之道不用私智

天門開闔翼註天門四字喻心又按天地一大心人身

天地一部分則人心是天心之門又按開闔猶動靜

明白四達按謂真知公知

生之畜之生而不有爲而不恃長而不宰是謂玄德

第二節 言守玄德之効以收上節能上節六

者則得下節五者効驗也
生之畜之按兩之字指萬物
是謂玄德按唐堯之民不知不識從帝之則是玄德之功

講義

十章は玄德をのべたので一節は玄德を守る工夫を申す

載營魄 營はいとなむ仕事をすることちつとしてゐないで世話をやく。魄はタマシヒつまり動き廻る魂のある體即ち人の身と云ふ意味。一口に云へば體也。體を車に例へて云と魂を抱いて……と

かく其の離れ易い魂を離れぬ様にしてゐる事が出来るかどうかと疑つた。是れ玄德を養ふ工夫である。一は老子の大事なものて魄

なり神なり道なりである、手の先きや足の先きの動く事は誰れても

見えるが其れを使ふ一つがある。專氣と氣を專にして致柔、ゴク柔かにしてどうでもなる、それで赤兒の如くなるかどうか、かうなれば玄德が養はれる、滌除玄覽、忘念を濯ひ除く事をすれば玄覽と云ふて精が見へる(極奥深く見へる眞實の神佛法で云ふ見性と云ふのも是れと同じだ、見へたらよいがそれを能くきづつける事勿らんか、折角見へた神を忘念のために疵をつけはすまいか、玄德を保てるものだらうか。又愛民治國、ヨク民を愛し國を治めるのに自分の勝手知恵を働かせはすまいか、少しも私を用ひなくして自然のまゝにする事が出来るか。天門開闔、天門が開いたり閉ぢたりしてよく働くを云ふ、此れは譬て心の事を天門と云ふ。天門と云ふは人間は天の一部分て天は元來心があるから生きてゐる人は其の分家を見た様だ。するとそれから段々奥へはいつて天の意を知る事が出来る、丁度本家の天に入る門の様だからかく云ふ、此の天門は少しも定まらない

動靜きまりがないそれが開闔だ、戸をあけたてする様なものだ、然しそれで雌の如く大人しくする事が出来るか。老子は能く雌を譬に出す、敢て天下の先に立たぬ意である、雄は先きへ立つが雌は雄の後へついてゆくそれが雌で雌の様に余義なくせねばならぬ時にする様に出来るかどうか。できればほんとしだがとかく雄になりたがつてゐるいで老子の如くに精神を養へば忘念がなくなるから自然の知か、明になつて明白四達どこまでも見へる。

四方の道理がよくわかる。此は自然の智であるが自分でなんてもやつてみたくてならぬ其の自ら手を出す事なく無爲にして居られ様かどうか。此れが皆自然と行はれたら所謂の玄德が出来る。

二節前の如き事が出来たればコト云ふ効用があると云ふ、それが玄德だと申す、玄德を持つてゆく人は萬物を生成する、之は萬物を指す故に生之、又生れたものを育する、サ之の通りに萬物を生じたら並

のものなら私をほこりたくなる。私がなした其の功を恃みやすいがそれをせず。是れかいはゆる玄德であると云ふのだ。

第十一章 主意言無之用爲有之利是所以貴
虚無。

三十輻共轂當其無有車之用。埴埴以爲器當其無有室之用。鑿戶牖以爲室當其無有室之用。

第一節 三喻

故有之以爲利無之以爲用。

第二節 正論

有之以爲利無之以爲用。按中庸所謂喜怒哀樂未發謂之中。是無之用也。發而中節謂之和。是有之利也。近思錄所謂冲謨無朕物來順應亦無之用也。又按心不能無思平心和氣是謂無心。

講義

無い位ひ能く働くものは無いそれだから虚無の道を守らねばならぬと云ふ事を言ふ。

一節、三つの譬を設けた。三十輻が一轂に共にくつついてゐる。此れが荷物をドシ／＼はこぶ、それは無があるからだ、中に軸をさす穴があるから其の穴を無と云ふ、車に釘をうつたら回轉せぬ。埴埴て陶器を作る、中に空な所があるから器の働きがある、空な所が無けれ

ば全く働きをせぬ。どうしても無が必要だ。一つの譬は家。戸は家の入口、牖は窓。家に戸や窓があるから、一部屋の働きがある。戸もなく窓もなければ全く用をせぬ。

二節、それ故に有のかたちあるもの働きをなすには無が必用である。どうしても有と云ふ實物と無と云ふ虚物が合はねば用をせぬ。コト大きな事を云ふ、易も形而上の事及び形而下のことを説いてある。形以上の學をせねば物質の働きの使ふことが出来ぬものである。

第十二章 主意言聖人去外欲存内性内性虚

無自然而已。

五色令人目盲。五音令人耳聾。五味令人口爽。馳騁田獵令人心發狂。難得之貨令人行妨。

第一節 言外欲之害

五色令人目盲云々。按、局一物則失目耳口自然之能。又按、大學曰、心不在焉、視而不見、聽而不聞、食而不知其味。即此章意。又按、目於一色則不能視他四色、是令目盲也。五音五味亦同。

是以聖人爲腹不爲目、故去彼取此。

第二節 言修内性

講義

聖人は外物の慾を去る、而して天の性と命を失はない。一節、外慾に述ふと害のある事を云ふ、五色も五音も五味も一方に

偏よると全体を知らぬ盲になつて了ふ腹は物を食へば消す丈けて外へ走らぬ、目は見へるから心がぢきに外へ走せて了ふ、腹の様に、食物が入つて來ればやむなく受取ると云ふ風に、腹は自分のためばかりする目は人のいらぬ事まで世話をする宜しくない。彼は一節を受け此は腹をさす、目をなさに腹をなしてそして外慾を去り内の性を完ふせよと云ふのである。

第十三章

主意言忘一身之寵辱而後可爲天

下、

寵辱若驚貴大患若身

第一節 言世人不_レ忘_レ寵辱是_レ綱。

大患按、大患、謂亡身之患也、何者驚寵辱者知有我身而不知有天下、是知有私不知公、不知公之人必招亡身之大患、又按人莫貴於身、

何謂寵辱若驚爲下得之若驚失之若驚是謂寵辱若驚

第二節 解第一節上句是第一目。

何謂貴大患若身吾所以有大患者爲吾有身及吾無身吾有何患。

第三節 解第一節下句是第二目。

吾所以有大患者爲吾有身。按、吾爲有身喜寵憂辱、適招亡身之大患是貴大患也。又按、以身爲吾有是私也大患也。又按、以身爲吾有是私也大患必至。以天下爲吾身是公也。大患必不至。陽明之所謂天地萬物一體之仁是也。何患之有。故曰仁者無敵。又按、孔子克己絕四皆無身工夫也。

及吾無身吾有何患。考異、古本及作苟患下有乎。

故貴以身爲天下若可寄天下、愛以身爲天下若可托天下。

第四節 言忘身之功

故貴以身爲天下云々。按、言貴天下而忘身愛天下而

忘身忘身而天下歸己身亦從貴重。又按此章即孟子所謂憂以天下樂以天下之意。蓋聖人亦人也。非無寵辱樂天下之寵憂天下之辱其寵辱也大矣。

講義

此の章は自分一身の榮辱を忘れて初めて天下をささめる事ができると云ふ。一身の榮辱に拘はつてゐる中は私身を考へる人てまだなか／＼天下などを治める事が出来ない。

第一章榮あれば驚いて喜び又辱あれば驚ろいて悲しむ。其の寵辱を見る事大患を貴ぶ如くに大事がる誠に其の身を亡すの患なる事を知らないてゐる。此れは是れ世間普通の人の事である。

第二節此處で寵辱若驚をとく之は寵辱を受けて云ふ此れは別に言はないても讀めばわかることと思ふ、次の二三節で若身を解く、

第三節、吾々が自分の身を失ふ様な大患。此の位大きな心配はないなぞそうなると云へば私が身を私かものだとしてゐるからそれで患が生ずる。私が身を私かものにしてゐると四方八方皆敵で大患が湧いてくる。今日の世事すべて其の通りで、私が身私か身と思ふ事がなくなると公平になる。そうなると吾れ何の患かあらんやて敵は一人もない身がないと思へばどうして人が敵とせられ様。此れ私と公との二つを云つた。元より天から見れば公私の差別ある事はない。

第四節は無私になると其の効用が大きいと申す。天下を治める事が出来ると申す。天下を貴ぶこと吾身の如くする様な人なら天下をよせても天下は治まるであらう、又天下を愛すること吾身の如くする様な人には必ず平易に天下を治むる事が出来よう。以て天下を托す可してある。此れよく／＼文字をはなれて道理を考へて

見るがよい。いづれの學問でも私を打ち破るのが一番の工夫だ、佛でも儒でもそうだ、陽明でもさかんに天地萬物一體の仁と云ふ事を言ひ、又儒では仁者に敵なしと云ひ、憂ふるに天下を以てし、樂むに天下を以てすと云ふてある。何んでも無私になり公にならんと大きな事は出来がたい、それで徳の大きな人を大人と云も又私の多い人を小人と云ふも此邊からだ。

第十四章 主意言無形之道能統紀古今

視之不見名曰夷、聽之不聞名曰希、搏之不得名曰微、此三者不可致詰、故混而爲一

第一節 言道無形

夷希微按夷平也希少也微細也。混而爲一按暗夜天地一黑雪中天地一白黑與白皆一則無也空也。

其上不皦其下不昧繩々不可名復皈於無物。是謂無狀之狀無物之象是謂恍惚。

第二節 言道如有如無

其上不皦其下不昧蘇註物之有形者皆麗於陰陽故上皦下昧不可逃也道雖在上而不皦雖在下而不昧不可以形數推也按道在形而上而如無故曰不皦道在形而下而有故曰不昧形上形下莫不有斯道。

迎之不見其首隨之不見其後執古之道以御今之有知古始是謂道紀。

是謂惚恍按恍有也惚無也謂如有如無。

第三節 言無形之道能統紀古今

執古之道云々按古今一道故知今之道則知古始之道故道也者所以統紀古今又按管子之異趣同歸古今一也莊子曰古猶今皆此意也又按中庸曰鬼神視之不見聽之而不聞体物而不可遺亦此意蓋鬼神斯道之神靈者。

講義

此章は道は形は無い様だがチャント無い様な所に道があつて物をしまりをしてゐると云ふ事を申す。

第一節、道に形はないと云ふ事を云ふ、之の字は道を指して云ふのである、見ても見へない、しかたがないから夷とても云はう、ズトツと平かになつてゐて際限がない。又聞かんとしても聞へずして仕方がないから之れを名けて希とてマレナ珍らしいおかしなものとしよう。又見ても見へずきいてもきこへないから今度は搏んとしたけれ共其れも得ずして此の通りであるから詰る事もどうする事も出来ない、それだから之れを混じて一の無にして丁ふ。つまり虚無の事を此んなに面白く言ふたのだ。

第二節、は無いと思へば有りあると思へばない先づ道を上に見ても明かならず、上に道はあるに違ひない即ち日月の運行四時の變更

を見ても道はたしかにあると思ふが明かに分らない、其の下即ち物の中を覗いて譬へば人間の形が結ばれてある其の形の中にやはり人の道と云ふものがある。茶碗でも机でも何を見ても、皆其の形の中に、其の道を有して居る、道のあるに相違ない事はわかる。して見ると極りなく繩々として繩を引き出す様にあつて名のつけられぬ程ある。然らば其れをとらんとしても得られず決極無形に飯して丁ふ。そこで無状之状無物之象とまあ言ふより外に仕方がない此れらを恍惚とばつと光つて見へないように強ひて言ふておくと云ふ。

第三節、此の道が古より今日まで紀りがついてゐる事を申す。之は道を指して云ふ、迎へては先づ第一に首が見へる筈だがそれも見へない又送つたら尾が見へそうだが又それも見えない。然るに妙な事には古より道は歴然として存してゐる、其の道を今にとつて今

のある物事を扱つてゐる。つまり一の道理が之れを支配してゐる
そこで能く古始を知るて古へ始めの之の道理、即ち道理にちがひな
いものだと云ふ事がわかる。それで之れを道紀と云ふ。今古に渡
りてきまりがきちんと付いてゐるに相違ないから斯く云ふたので
ある。

第十五章

主意言有道之士玄妙不可測識而

能成清物生物之功

古之爲士者微妙玄通深不可識、夫唯不可識
故強爲之容、豫兮若冬涉川、猶兮若畏四隣、儼
兮其若客、渙兮若冰之將釋、敦兮其若樸、曠兮
其若谷、混兮其若濁。

第一節 形容有道之士

猶兮若畏四隣、按猶豫皆獸名、其所遲疑不敢爲物先
故猶豫如畏。

儼兮云々、按堅守道故儼且敦、不逆物、故渙兮守虛故
曠兮和光同塵故如濁。

孰能濁而以靜之、徐清、孰能安以久動之、徐生
保此道者不欲盈、夫唯不盈故能蔽不新生。

第二節 言生物之功

孰能濁以清之、徐清云々、改正、久動、今本無動字、按動

對上靜今本削之非。唯疑久字恐衍。按聖人在濁中能清之、在安中能生之、皆從自然之道也。又按古之能爲士、獨能徐清之、徐生、又按靜之之字指上濁動之之字指上安。

故能蔽不新成。按蔽與弊通。道本虛無、故弊懷無形。無形何須新成。

講義

此の章は有道の士は其徳奥深くして凡人より測り知りがない、しかし能く物を生じたり物を清くしたりして色々の功をする。それで只此の功に由つて初めて道があり徳のある事がわかると云ふ事をのべたのだ。

第一節、徳は計られんが其から形容して見ると此んな物である

と云ふ。士は士農工商と云ふ風に人に階級がありそれで農工商は主に自分丈の事丈けしかないが士になると自分の事ばかりでなく多く人の事まで世話をする。士は事なりて治めるとか乃至は仕事をすると云ふ事よりして士と云ひ出した。此處では有徳の君子をさして云ふ。此等の士は微妙玄通と奥深く際限がない。測り知る事が出来ない。どうしても外面から知られん。故に強ひて此んなものかと形容して見るだけだ。豫は猶豫とて獸の名にして疑深く先きにすゝむ事をためらう。此れよりぐずぐずする事を猶豫すると云ふ。グズグズして丁度冬川を渡る様に寒くてならんから渡らずにすめば回つても橋をこし度い。猶分もやはり同じことあたりをながめてぐずぐずとしてゐるゝそれですゝまな様子がある。此れは敢て先下の先とならず、物が來れば自然と其の物に應ずるので、是れ老子の奥の手。儼兮はあごそかな様子で彼の虚無を守つて

居るからだ。又混分として判然せぬのでこれが水これが泥と區別する事の出事ない様に濁つた様に見へる。普通な人とも交つて和光同塵のやかりかたをしてゐるのを云ふ、目立つた事は決してせぬして見れば世に役に立たない様だが大いに然らずで能く物を清め能く物を生ずる効用がある。

第二節、ダレが能く濁つたものを之れを静かにして徐に清くすまして了ふであらう、初には濁るが長く待つてゐるうちに水を泥とわかる様になる、世の中に交りて共に濁つてゐる様だが自然に外の人をも清らかにしてしまふ。又誰れか能く安んじておちついて扱て此の安の字に就て且つて佐藤一齋先生が安は門冠の下に女であるから女は家に居て中を治めるもの外へ出る事を喜ばぬ、家に居る事をよろこんで安んじてゐる事、腰をおちつけてゐる字だと云はれた。全く其の通りだ。其のおちついたものを動かして其れから

徐ろに物を生ずる。此の久の字はなくてもよろしい動の字はある方がよいが、前に静の字がある之れと反應するのはよいが久はなくともよいと思ふ、ことによると愆字かも知れぬ。水が澄んで居るばかりでなく其の中に自らあの藻の様なものを生ずる事をする、此れ動くので物には静の方面と動の方面との二つが必ずある。

さて此の動かしたり静かにしたりする自然の道を古人はよく保つてゐるそして其の人は盈つるを欲せない。盈ると溢れる、兎角八分目がよいと思ひ、だから人の先きに立たない、立つと鋒先を折られる、虚無自然の道を守つて蔽と掩はれかくしてデットしてゐたら能く物を静かにしたり動かしたりする効用があると云ふ。

第十六章 主意言天道虚静與天一則真道

致虚極守静篤万物并作吾以觀復

第一節 揭一章大意

致虛極守靜篤開元疏致者人之必自來如春秋致師之致蘇註致虛不極則有未亡也守靜不篤則動未亡也按極虛之極也篤靜之篤也

吾以觀復按復于虛靜也即復天道也

夫物芸々各復返其根返根曰靜是謂復命復命曰常知常曰明不知常妄作凶知常常容容乃公公乃王王乃天天乃道道乃久沒身不殆

第二節 言自萬物動作至與天一漸序

復歸其根云々按莊子復性本于此復命朱子解履禮

爲復理者亦同然非所以解論語本義孟子曰堯舜性之湯武反之反之即復性也中庸曰率性之謂道亦復性也

知常曰明按常道不易知常道不易則真如明徹程子曰不易之謂庸庸常也亦此意

知常常容按孟子所謂萬物皆備於我亦此意

公乃王按洪範所謂無偏無黨王道蕩々亦此意

王乃天按王道周普同于天道

道乃久常道不易故長久

沒身不殆按所謂明哲保身者反應妄作凶按此章畢竟不過言動中有靜之理何者天地日月動而不已然

至其極則復本、毎年如一。是守虛靜之道也。猶汽車往來不已、亦不過守靜定之一軌道也。

講義

道は靜が元て極に達すると天と同様に虚靜なものとなると云ふのが此の章の大意である。

第一節、は即ち章の大意を説くので虚をば極の虚に致し又靜を生半熟の靜でなくして眞の靜に守り止める事が出来ると、萬物が並作とて動いて出てくる。其の中へこちらもはいつてゐて然かも虚靜を守つてゐるとまた萬物が元へもどりゆく事が見へる、つまり道の本源が見へる様になると云ふ。そこで吾と云ふのは道を守る人を指す。動中の靜、靜中の動を云ふたに過ぎぬ。

第二節、萬物は動いてゐるものだがそれが天と一にならんけれ

ばいかん、それまでの順序を長く詳はしく云ふ、丁度一節を又更らに詳はしく説く様なものだ、芸々は動いて働く様子、しかし芸々と動いてゐる様だが又必ず本源へ復返する草木を見ても春と秋とて様子がわかる。

春になると花が咲き葉が繁る。又秋冬の頃になると落ちて了ふ又冬を過ぎて春になると又出てくる。此の根に返つたのが靜て天命に復するので天が靜が命じて動かすのだ、莊子に復命のこと、復生として説いてある、丁度其の事だ、人の性は天より授つたものだ、云へば命で、性根を持つてゐると云へば生だ。是れ道學の根本説である。復命を常と云ふ、定つてかはることがない變るのは道てはな、い、是れが常道と云ふもの、中庸にも變せざる之れを庸と云ふとあり、道がかはらないと知る、是れ明と云ひて眞の智だ。老莊は、小智を、さ、ら、つて、大智を、好む。常を知らざれば無茶苦茶をやる、そこで凶に陥

り生を亡し國を失ふ様になる、見へないからかくの如くになるそれが道を知つた人は人と共にゐても明であつて常理を知つてゐるか
らまちがひない。常なる事を知れば容れると云ふ事が出事る。

我も人も萬物皆當然に従ふ。孟子にも萬物皆我が心に備ると云ふてある、吾も萬物も同じものである、それを聖人賢人は知つてゐるから襟度が大きく度量が廣い。天地同根萬物一體の智見があり、そこで初めて公平と云ふことができてくる、とかく是れがわかりにくいもので我れだの私だのと云ふ事ばかりに走つて不道理なことをやる、公になると初めて天下の主となれる。此の間も言ふた様に天下の主ともなる人が自分勝手をする人であつたては、誰れも王とはいふ。公てなければ人の上に立てない。

書經にも偏なく黨なく王道蕩々とあり、王となれば即ち天と同様に天と云ふものは偏がない、一視同仁て禽獸をも捨てず人間をのみ

を尊ばず一様に之れを生育する、天になれば吾が云ふ道である、もう道に合する様になれば常だから長がもちがする、久しいから一生涯危ぶない事がない、是れ即ち忘作而凶の裏を云ふたのだ、常道さへ守つてゐれば凶に陥る様な事はない世は絶へず動いてゐる、其の中に自ら虚静がある、此れは能く考へないとわからない、鐵道線路は一つで静かであつて動かない、其の上を汽車はたえず動いてゐる。此れとりも直さず静中の動、動中の静である。日の東に出て月の西に沈み、乃至四時の循環する何れもチャンと元へもどる、寸分違はぬ、一旦寒くなるが又暑くなる、定つて一貫の道を通つてゐる。人は動に目をとられ道を見ないだから迷ふ様になる。此等のことは各自銘々に考へねばわからぬ、どこまでもまじめの工夫がいる事は勿論である。

第十七章

主意言大上不言之信

大上下知有之其次親次而譽之其次畏之其次侮之

第一節 言人君有四等

大上云々按大上猶言極上註非又按四之字皆指君信不足焉有不信焉

第二節 言其次以下三等人君信不足

信不足焉有不信焉按二句言下三等人君悠兮其貴言功成事遂百姓皆謂我自然

第三節 言大上之君不言之信

悠兮貴其言云々按言大上之君貴言無言而有信即不言之信百姓皆謂我自然即不知不識從帝之則之意我百姓自指也又按悠兮逍遙不迫貌

講義

太上は一番上善の君でその人は不言之信とて口で云はないでも人民は之れを信仰しきる、そこで一節は世の人君たるものに極上と又次と其の又次、又次と四通あると云ふ事をきめておいて申す。太上は上の上と云ふ事て註にある、太上は大人を謂ふなりてはない、太上たる一番上等の君となると下人民は上に君があると云ふことだけには知つてゐる、居るがどうして治めて居られぬのか一向に知らぬ

知る心要がない。世が治つて何一つ小言がないのであるから。其の次の人君になると盛んに仁義を施して人民を救ふを目的として政をするから人民は之れを厚く親み高く譽る、斯様に仁義をかゝげて人をなづけんとするは二等に落ちた人君で其の次第三等の人君になると徳を施さずに法を以て下を治めんとする、法を施せば直に刑に附せらる、法にばかりまかせると此は下の方でも怖ろしいからコハクテ之を畏れる、此れは先づ羈者の仕事だ日本て云ふなら武家であらう。其の次は凡君で下は之れを侮り馬鹿にする以上の様に人君に四通りある事を云ふて。

第二節 信足らざればの信は人君の信で信ぜざる有りの信は人民の信を指して云ふ。即ち太上以下の人君と人民との關係を云ふたので上人君たるもの至極の信がなければ人民はどふしても遂には之れを信せはぜぬ。之れは二等三等四等の人君の欠點を云ふた

のである。

第三節 此處で本へもどつて太上の人君の治め方を申す太上の君たる人の治め方は悠然として迫まらぬ、平氣な様子で言を貴び多辯は勿論、物言ふ事をあまりしない、無言ではあるが天下の治も成就し政もとげられる。太上の徳があるから下は自然に治まる。そこで下は上のお蔭だと思はないで自分だと云ふてゐる。かくなれば即ち眞の治平である。人は元より自治の精神がある生きてゐる事の自然に従へばそれでよい故に自治にまかせてやるのが太上の治め方だ、知らず知らず帝の則に合ふと云ふのが太平の極上である。

第十八章

主意言名教立而大道廢

大道廢有仁義、慧智出有大偽、六親不和、有孝

慈國家昏亂有忠臣

大道廢而有仁義按此仁則非善仁之仁大道是自然之仁

慧智按慧智小智私智非自然之智

六親不和而有孝慈云々考異孝慈一作孝子按天下皆忠孝則無孝子忠臣之名又按魏徵欲爲良臣不欲爲忠臣亦此意又按仁義忠孝是名教

講義

老子は元來名教がきらいで其れを廢したいのだ名教を作らぬ前に道が存してゐると云ふのが老子の云ふところ。で老子はなんても自然に従へよと主張する。して仁禮智は昔の大道がすたれて其

のために出たのだと云ふ。

第一節 此の章は一章一節になつてゐる、大道は老子の云ふ大道である自然が全體の道であるのだが(上も自然下も亦自然)元より仁義が無必要だと云ふてはないが自然の大道が自然と行はれてゐる間は自然に仁義と云ふ事も行はれてゐる。故にはや仁義などと云ひ出すのは世が末になつたのであつて即ち大道が廢れた證據である、まだ仁義はよいが慧智とて小智慧を用ゆる是れが非常にわるい下も亦之れに習ふて益惡智慧をめぐらして大偽を生ずる様になる此れ皆私智から出た仕事であつて最も老子の嫌ふところである。

次に又段々とわるくなる、六親は父母兄弟夫婦を云ふ、自然に捨て置けば相和して自然に世に従ひ私をせぬのにたまに何事があつて父母に親切な事をする様な人があると孝子だと賞めそやす、大道の行はるゝ時分には決してそんな事はなかつた、そこで又國家が混

亂して大道すたれ正しい臣がなくなると其處でたまに君に特別に
よくする人があると忠臣と云ふて人がほめる様になる、初めのはじ
めは皆忠臣であるが道がすたれるにつれてこう云ふ風に特別に忠
臣と云ふ名が付く様になつてくる、仁義忠臣孝慈はわるいのはな
い、孝慈忠臣が少くなつて來た事を云ふ。唐の魏徵が云ふた事も此
の意で良臣たらんを欲したのだが老子は其れ以上に此の世の中の
人々をひつくるめて全くの忠臣孝子にしたいと云ふのである。

第十九章

主意言人君治民不在文而在素樸

絶聖棄智民利百倍、絶仁棄義民復孝慈、絶巧
棄利盜賊無有。此三者以爲文不足故令有所
屬見素抱樸少私寡欲。

此三者云々按三者聖智也仁義也巧利也筆乘曰屬
猶附着也聖智仁義巧利三者由世道日趨于文故有
此名文不足以治天下不若使之屬意于見素抱樸少
私寡欲而天下無事矣

講義

老子は個人に就ての事よりも治國の事を多く云ふてゐる此の章
人君たるものは文があつてはいかないと云ふ。

智は普通の智で此等の智を絶對に打ち捨て、しまへば人民の利
は百倍する様になるだらう、上が自分の聖智で治めてあるのだと云
ふ匂ひをだしてはいかぬ。人民が吾が自然と云ふ様にならねばい
かぬ、此處では人君たるものはペロペロと聖智を弄してはならぬと
云ふ。又孝慈を捨て元の自然へ返せば丸く孝慈でそれこそ眞の

自然だ、それだから上が孝慈だの何んだのだと云ふてはいかぬ、又上が利益をつけよふとする、此れも捨てねばならぬ、さすれば下には盜賊がなくなる、上で巧をなし利をするから盜賊が多くてこまると云ふ事が出来る、孔子が季康子先づ第一にあなたから無欲になれとすゝめたと同じことである。

然らばどうするか、其は即ち人君はなんでも文と飾りを捨てよと云ふ。此三者はホンの飾りて治るに足らないのだから、屬と人民が目をつけ心をつける、即ち屬と云ふは上がする事を下が意をつけるを指す、文とあやのある眼立つた事をする、とぢきに目をつける様になる、下の目をつけない様に、それには素と樸との處を抱いておつて私を去り欲を少くして居れば、下の者は目のつけ様がない、そこで人君たるものは上にはあるが、一向下々の爲めになるか爲めにならぬか分らない様なところ、にゐなくてはならぬと云ふ、此れいづ

れも極言してあるので、文字によく氣をつけるがよい、そしてよくよく意のある所を察せねばならぬ。

第二十章 主意言聖人絕世俗、末學復歸天道

本

絶學矣。憂唯之與阿相去幾何。善之與惡相去何若。

第一節 言絶俗學

絶學無憂云々、按學謂喜善畏惡之學、翼註、唯阿皆應聲、唯恭而阿慢也、筆乘、人爲學、憂不得善也、吾能絶學、則無憂之有、然非強絶也、知性本無善也、彼爲善者、雖

異于惡而離性則一其少異者如唯與阿之間耳夫以善惡之同而聖人亦不廢善者蓋人之所畏不得不畏所謂吉凶與民同患也至其心游性之初方且荒兮未央而豈若善之有涯淡可限量哉

人之所畏不可不畏荒兮未央哉

第二節 言和光同塵而心遊于天

衆人熙熙如享太牢如春登臺我獨泊兮其末兆如嬰兒之末孩儻々兮若無所皈衆人皆有餘而我獨若遺我愚人之心也哉沌々兮俗人昭々我獨若昏俗人察々我獨悶々澹兮其若

海颺兮若無止衆人皆有以而我獨頑似鄙我獨異於人而貴食母

自第三節至第六節 反覆言聖人與衆人異

至第六節歸宿主意

衆人熙々按兢進貌其末非翼註兆動之微也貴食母翼註食音嗣食母乳母也見內則按乳母生我之本也喻虛無自然之道是一篇歸宿處

講 義

此の章は先きの章よりもつとひどい言を云ふ、世俗學を絶へば天

道の自然に皈ることが出来るそれだから學をやめよと云ふのだと云ふのはあまり學問をし過ぎて末へ走ると本の自然を忘れて了ふからわざと此ふ云ふ荒い事を云ふて見せる言ひ換れば本へもどるが眞の學問だと云ふ此れは莊子を讀むとわかる其の入り掛りと云へばやはり書を讀まねばならぬ而して掲げ句には自然に入ると云ふてある。

第一節 學を絶てば憂はない唯も阿もともに返事の言葉で唯はうやうやしい返辭阿は軽い返辭唯と阿と異ひはするが其れがどの位であらうつまり承知したと云ふまでのこと、コ、デやましい事を云ふと尙更にやかましくなる善と惡との間がどうだ。此れもつまり善惡が別れたところで知れたものだ絶對善になれば惡の相手はないだから善と云つたつて惡と少しがちがひがないしかるにあればこれとばかり言ふてゐると心配ばかりになるそんな事なら一層

のことやめてしまふがよいと云ふ。

第二節 やはり人の中にはいてゐると云ふて先きと對應する然りと云へ共並の人の畏れることはいくら老子の學をしたからとてやはり畏れねばならぬ、コ、は和光同塵の方便を言ふのである。それが荒兮と廣く極りがない其れどころか際限がない並の人と同ふしてゐるがしかし自然の徳をそなへてゐるから人とは心持がちがう。

第三節 今度は聖人と衆人と異つた點をくどく述べたので世間の人には丁度名譽の話金のことになるとまるで熙々とよろこぶ其の様は太牢の御膳に向ふ調子。春の麗な日に高い臺に登つて四方の眺をこらすが如く至つてザハツイてゐるに反し我れ獨り泊兮として別に是ぞと云ふ望も起らず丁度未だ笑ふ事も知らぬ赤ん坊の様優々と云ふは今本には乗々となつてゐる其の方がよい、ブラリと

してより所がない様だ。世間の人は皆なそれく、功名富貴の望を抱いて心一杯になつてゐるが自分には一向無欲無私。丁度物忘れをした鹽梅で沌々として馬鹿の心によく似てゐるわいと云ふ。俗人が智慧の先きをべらくと光らせるのに我れ獨り無爲淡然として昏々悶々と牙へ切らぬ、澹兮と廣い海の様子であつて騷乎と物に離れたノンビリした心持がある。

世間の人が以ゆる有りとして何にか一つ爲してやらうと意氣込んでゐるに我れ獨り無爲昏々として何も知らぬ田舎の人間の様である。サテそこで一番終ひに其のわけを云ふ。我れ獨り人に異るて世間の人とはまるきり様子が違ふと云ふわけは母を貴ぶからて其の母と云ふのは人の母ではなく即ち天地の母とも云ふ可き自然の道を指したのである。無爲自然の大道を守つてゐる人の様子は丁度自分の様なものであると申した。

第二十一章 主意言道無而有爲萬物之始

孔。德。之。容。惟。道。是。從。道。之。爲。物。惟。恍。惟。惚。惚。兮。恍。兮。其。中。有。象。恍。兮。惚。兮。其。中。有。物。窈。兮。冥。兮。其。中。有。精。

第一節 言道之狀

孔德息齊曰孔德大德也

其精甚眞其中有信自古及今其名不去以閱衆甫吾何以知衆甫之狀哉以此

第二節 言道之眞總衆甫

其名不去按名精真之名也即道也是一章眼目

講義

道は無であるので其の無から天地の萬物が生れ出て來る其れ即ち自然の道が本となるのだと申す。

第一節 孔徳の孔を註には空也としてあるが息齊の云ふ如く孔は大徳なりと見た方が好い。大徳の人は常に自然の道にのみ従つて他へ心を走らさぬもので心空淡然として御座る、そこで其の道と云ふのは奇體な恰好をしたもので惟れ恍惟れ惚有にして無の如く無にして有の如く言ひ表し様もないほど奇妙なもので其の實チャンと萬物生成の本元を具へてゐて天地萬物何から何まで其處から生み出されて來る。窃たり冥たり。其の中精あり其の自然のはたらきから萬物が生ずる、其の萬物には何れもそれくゝの性を持つて

柳は綠花は紅少しの違ひがない柳はいつも綠花はいつも紅。第二節 と云ふわけで眞實一貫少しのあやまりが無いと云ふ有様でズット太古の世から今日に至るまで無名を以て道の名とする其の名は變らない。衆甫と云ふは、衆は萬物、甫は物の始めてとりもなほさず萬物の始をすべしと云ふ事。萬物盡く此の道より出て來ないものは無し。丁度第一章の衆妙の門と云ふ意味と同じである。

第二十二章 主意言聖人抱一不與物爭蓋捨

已而從物之自然自然即一也

曲則全枉則直窪則盈敝則新少則得多多則惑

第一節 列叙古語

是以聖人抱一爲天下式不自見故明不自是故彰不自伐故有功不自矜故長夫惟不爭故天下莫能與之爭古之所謂曲則全者豈虛言哉誠全而皈之。

第二節 言聖人所爲以實古語

不自見故明云々按四個不自字皆捨已工夫歸之按復歸性命之正也即復性也

講義

聖人は只一と天の性を抱いて居るばかりで物と争ふ事がな

つを守つて大切にしていゐる其れ故に自分の我を打ちすて物には物相應に自然が具つてゐる其の自然に従ふてゆく。一を抱くとは自分の自然を守ると云ふこと。自分も物も共に自然に従ふと云ふことになる。

第一節 古語を引用しておく、曲と枉とは違ふ曲は重箱の隅までもと云ふ風な細かなこと。そうすると全しとは治くゆき渡ると云ふこと、何でも物の隅を委細にきはめると却つて満遍になる、それは丁度水の様だ水は頭から満遍にはならぬ、必ず隅から隅へみちてゆく枉れば却つて真直になる物は頭からすぐまっすぐにはならぬ京都と大阪とに一直線は引けるが自然は枉である。此れ皆自然のこゝとを申す。窪なれば物がみちてくる茶碗でも何んでもそうだ敵れば即ち新なりて物には新しい通しやぶれ通うしものはない。慾が少ないと却つて其の慾が得られる足るを知つてゐると却つて足

る以上になる。其の返して慾が大きいと一もとらず二もとらずになる。却つて失はれる。此の言は古語であつたのを老子が引用したのである。

第二節 聖人が右の實事をなすことを云ふ、聖人は一を抱いてそれで天下の式、手本となる天下中のものが之れを手本にしてゆけばよい、此れやはり虚無自然のことを云ふのだ、其の仕方はと云へば自ら自分の器用發明をば人に見せ様とはしない。それ故に自然に明かになる、むりにはしない。飾り立てをしない。すると却つて人から明かに見てくれる。又自分からはとしないから人が是としてくれる。又自分から伐らないから却つて其の功が長く續く。自分が賞めると却つて人が叩きこなす様になる。以上の事はいづれも人と争ひをする事にあてゝある。聖人はそんなことはない、少しも争ふ氣がない、其れ故に天下中聖人と争ふものがない。自分が争はん

と人も争はぬものだ。大徳の價は即ち此んな處にある。これで前の古語と結び合はす、自然の道は天命て人々分上にもつてゐるそれを傷けぬ様にせねばならぬ。並の人は自然に傷をつける。しかし聖人は自然の道を傷けなくて全ふする全ふすれば自然即ち天意に歸して了ふと好一般。

第二十三章

主意言聖人與物物之自然同其

体相樂相信故能長久

希言自然故飄風不終朝驟雨不終日孰兮爲此者天地尙不能久而況於人乎。

第一節 言自然之道持久

故從事於道者道者同於道。德者同於德。失者同於失。同於道者道亦樂得之。同於德者德亦樂得之。同於失者失亦樂得之。信不足焉有不信焉。

第二節 言聖人與物々自然之道同。体故長

久

按天下物々皆有自然之道。有自然之得失。聖人與物同得失而不相戾。唯任自然故能長久。

講義

此れも前章と意は同じて聖人は萬物が自然の理をそなへてゐる

からそれと同居して親しく交つてゆくから永く天の徳が續くと云ふ道理を申す。

第一節 自然の道は長く保つと云ふ。希言は至言と云ふてもよい至極上善の言である。自然は自然で長がもちがあるが飄風の様な一時的のものは一朝を保たないで止んでしまふ。夕立もそれとおなじ様だ。だれが之れをするのだから、それは天地がするのだ。此の天地がするのなら長がもちかしそうであるが、そうはゆかない、それだ。ものを況んや一時的のことに人間に於て長く保ちつゝかれよふか、故に希言は自然であると云ふことになる。

第二節 此の聖人が萬物と親交する様子を云ふ。道は自然で其れに従事するものは、道者の二字は淮南子にはない。衍文と見たがよい。道と同ふする上の道は自分の道で、下の道は物の道である。つまり自他同様になるのだ。徳の字は得がよく、徳でない方がよいな

ぜなれば後の失は失とあり自分の得るのも人の得るのも同様に得る又自分が失ふことも自分丈けてなく人と同様に失ふ得失は是非ある事であるが人と物を同ふするは共に自然である。得失は盛衰などと云ふと同じ。

第三節 得失ともに自然の道に従ふてゆくものだから向ふの道もかゝる善い友立を得るをよること。私もかゝるよい友立を得させて下さつたとしてよること。得失いづれも其の通りである、妙なもので自分のことは人に影をうつさせる。自分に信仰が足りないとなつて下の者も亦こちらを信仰してくれない。なんでも同じ様になつてくるもので結局人ではなく自分次第と云ふ事にある。此うなれば長く道を保つてゆく事が出来る。此の事を左傳に人と慾を同ふすとある。ホシイと云ふ事は皆自然だ然しホシイからとて獨り占めをし様とすると争ひが生ずる。人と慾を同ふするとある此れを守

つてゐれば誠に争はない筈でそして公平であるわけである。

第二十四章 主意言有道者不處于余食贅行

企者不立跨者不行自見者不明自是者不彰
自伐者無功自矜者不長其在道也曰餘食贅
行。

第一節 述余食贅行

物或惡之故有道者不處。

第二節 言有道者不處

講義

此の章は道德のある者は餘食贅行と云ふ場合にはおらないと云ふことを申す。

第一節 餘食贅行と云ふことをのべておく、企者不立、企と云ふ者は阪と云ふと同じで物を採らんとする時踵を企てることと企てるは一時的のもので久しく立つて居る事は出来ない漸時企てる事が出来るのみ、跨者不行、跨はまたがることと此れも長く道をゆくことと云ふことはできない、自見者不明、何も自然にあらはれるてなしに自分から強ひて表へ張つてあらはそうとするこれは一時は人をだますことが出来ても始終に明かに才徳が輝くものではない。却つて毀損する様になる。自然に現るゝものはいつまでも明かである。自分ぎめて善いとするものもつまり前と同様にあらはれはせぬ。何んぞ事をして功をしたとしてほこるが自然と人からほめてくれるでなくては其功は直きに消へ失せて了ふ。いづれも皆同じである

自矜者不長矜は、ホ、コ、ルと訓ずるが其の中にかざる意味がよくまれている、それも矜るも一時はよいが永續はしない、此等上にのべた事柄はいづれもよくない此れを眞の道のところへもつていつた時には是れは餘食贅行と云ふて無用の長物。餘食は餘計な食ひ物、贅は身に餘計な肉即ちコブで人に要らないもの。人にいらぬものはない方がよい。上述べた六つの事柄は丁度それと同様だと云ふ。自然になつた事をのぞいて無理になしたことを此んな風にわるく云ふ。

第二節 物とは大勢の人の言、物論と云ふときの物でやかましいと云ふ意味。前の様に餘食贅行をすると云ふと並の人から悪まれるばかりでなく有道者からは鼻つまみにされる。有道者はそんな餘食贅行と餘計な所などに居りはせぬ。

第二十五章

主意言自然之道在無稱可稱非道

有。物。混。成。先。天。地。生。寂。兮。寥。兮。獨。立。不。改。周。行。而。不。殆。可。以。爲。天。下。母。

第一節 形無稱之道

有物混成羅什曰妙理常存故曰有物萬道不能分故曰渾成按物指道也

吾不知其名究之曰道強爲之名曰大大曰逝逝曰遠遠曰反

第二節 言有稱之道

故道大天大地大亦大域中有四大而王居其一焉人法地地法天法天道法自然

第三節 列舉四有稱歸入無稱自然之道

講義

自然の道と云ふ者は何んとも名のつけ様がない名がつかざる様では道ではない。強ひて人に教へたり語るためには名をつけないと承知をしないから名をつけるが本來は名のある可きてない。名のつけ様がないものだと言ふ事を先づ云ふて置く。

第一節 名のつけ様のない道先づどんなものだと形容をして云ふ名がない様ではどうしても様子を云ふより外に仕方がないか

ら其れを云ふた物と云ふは道を指して云ふた辭。混成とにごつて
 ボヤツとして何か物が出来てゐる様子それが天地に先き立つて出
 來てゐる。そこで其れはどうも寂たり寥たりて極々寂むしいもの
 である、それが出来た以上は何時までも改むることはない變ると云
 ふ事はない。自然の道と云ふ者はいつまでもある又其の道と云ふ
 ものは周行とてどこへでもゆくがしかしそれが隅々の危いところ
 へ行つても殆うい事はないどこへ行つても大丈夫だ。あたりにみ
 ちみちてゐるのだ。此んな結構なものだから天下の母とする事が
 出来る。母とは元と云ふ義に用ひたそこで此の自然と云ふものは
 不思議なものであると云ふ。

ところがそうばかり云ふて置いた丈ではわからん強ひて名け
 て道と云ふ。此の道と云ふも人から道と云つたまでのことだ、此れ
 が名をつくつて名づけて大と云ふ其ふなると大なる道に於てはど

ごまでもゆく、天地のあらむ限り物のあらむ限りどしどしゆくから
 遠と云ふ、ゆくがやはり道はやはり元へもどつて來る故に反と云ふ
 そこで強ひて道を名づけた其れを並べたて、又元へ戻つてゆく
 と名のない道になつて了ふと云ふ事を申す。

前の通りのわけて道は第一番に大なるもの次か地、次に王が大で
 ある此の四も大なるものであるが域として大きな界がある其の界と
 は人の思量の及ぶところまでを云ふ。そして人も四大の一即ち王
 と云ふのに居るしかし王は地にのせられてゐる故に地に法つてや
 るより仕方がない。人間だからやはり動くに従はねばならぬさて
 其の地は天よりも小さい故に天に則らねばならぬ、天と云ふものは
 天てやはり則る可き大道と云ふものは天てやはり則る可き大道
 と云ふものがある故に其の寸分違はないで動いてゐる道に従はね
 ばならぬ。其の道も極々せんじつむればやはり自然に則らねばな

らぬ。自ら然る可きてある其の物を手本にせなければならぬ。初め物ありと云つて説き及んでやはり自然の靈妙なる宇宙の大道に歸着して名もなくなつてしまつた。

第二十六章 主意言重靜爲根本

重爲輕根靜爲躁君

第一節 言主意

是以聖人終日行不離輻重雖有榮觀燕處超然。

第二節 引聖人證之

終日行不離輻重云々「論語」曰君子不重則不威大學曰靜而后能慮亦此意
奈何万乘之主而以身輕天下輕則失本躁則失君。

第三節 反說

講義

此の章の論はひくいが重いと云ふ事と靜と云ふ事とを根本にしてゆかねばならぬと云ふ。

第一節 主意丈けを言つておく、重は輕の根で輕いものは重いものを本とするので木に由つて見ても重い根があつてはじめて四方に枝が出てゐる様だ靜と云ふものは躁の君とて君とは元にたどつ

た言て大本だと云ふこと、だから重静は軽躁の本だと云ふ事になる。

第二節 聖人を引いて前言を證據立てる、前にのべたわけを以て聖人とも云はれる。一方は一日中あるいても(軽いこと)輻重と云ふ衣食を積む車(重いこと)を離さずにつれてあるく、そこで榮觀とにぎやかなみせものがあるとも、これは躁の方の事を云ふ。燕延して安らかに獨り打ち出た様に打ち上つてゐて馬鹿バカしいさはぎはしないつまり静なところがあるから躁がある、先づザツト聖人は此の様に静かにしてゐられる。

第三節 其れに反した事をしてはよくないと申す。萬乘の大國の大主たる方は自ら重くしてゐなければならぬ。自ら輕んじて先きにならうとする様ではよくない。輕ければ本を失ふ。さはぎ立てると君即ち静を失つてしまふ。註の様に君を人主と見てはよ

くない、重々しく静かなところを元にしておかねばならぬ。君子重からざれば威あらずと孔子も言はれ中庸には静にして後よく慮るともある此の二者は大事なものであると云ふことを申した。

第二十七章 主意言聖人任人物之自然而治

之

善行無轍跡、善言無瑕譏、善數不籌策、善閉無關鍵、而不可開、善結無繩約、而不可解。

第一節 泛言自然之妙

是以聖人常善救人、故無棄人、常善救物、故無棄物、是謂襲明。

第二節 言聖人任人物之自然治之

是謂襲明。息齋曰由人與物皆有此明。聖人還其元明。示之。故曰是襲明。至襲明則均于一。

故善人者不善人之師。不善人者善人之師。

第三節 聖人弃取善人。不善人皆爲治人之

用言。襲取人物之明理。非以我明照人物。

不貴其師。不愛其資。雖智大迷。是謂要妙。

第四節 更進一層言聖人所以自處與前二

等人異而凡人不能知

講 義

此の章は聖人が人を治める妙諦を申す。

第一節 自然と云ふものまことに妙なものであることをのべて置く。自然は自然に出来たものだから實に妙なもので第一の善は人間の足、あれは自然に出来てゐるものであるから何うしても歩かないてゐられない。車であるくと轍がつくが人の自然の足で歩けば轍はつかない。人間業て色々物に物をこしらへるものだから跡方がついてよくない。善言、言ふ可き事は言はないてゐられないと云ふ自然の言に決して瑕論はない。余計な事を言はないからである。善數、自然の數と云ふものは籌策、丁度竹のはし見たいなもの、後世になると算木などを用ゆ、人は別段算木を用ゆる必要がない、一を別てば二、二を合すれば一となるは自明の理である。少根の人は忘

れない爲めに算木見たいなものを^ク用ゆるのである。善閉人間の作つた門だと鍵があるが自然にとざされたものは關鍵を用ゆる用かない。

善結 自然によく結びついたものは^ククル^シメルと云ふことはないけれ共解くにとかれない。

第二節 自然位ひ尊い者はないから自然に任せておさめる、任せさへすれば世は治まる自分流義にするから世は治まらない、上の理を以て聖人は能く人を救ふて人を治める世の中にいらなくてしてしまふと云ふ人はない世に善惡差別はあるが其の分其の分に從ひて治める。只に人ばかりでない禽獸草木までも救ふてゆく。一木一草一禽一獸少しも捨てたものはない。此の治め方を襲明と云ふ。掩ふてまるでこちらへとつて了ふ。明は自分の得手とするものは必ず明て善は善で明るい惡は惡てあかるい、むらにそれを持

つてゐる、それをこちらから掩ひとりそして治めるのである。

第三節 コ、は惡るい者は仕方がない様に思ふがそれを其の儘役に立たせる方法を云ふ。此の節で云ふ善不善は前きの自然の善でなく並の善不善である、自然の善は絶對の善で善不善は相對の善である。善人は不善人の師て即ち不善人の手本となる可きものと云つて不善人も亦入用て善人の師即ち不善人をとつて自分の戒めにするからどちらにも役に立つ、此れ孔子が賢を見ては均しからんことを思ふと云はれたと同じである。

第四節 總じて聖人は物に好惡愛憎の感念がない、善いも惡るいも忘れて了ふ、善惡何れも各別に愛惡す可きてない。老子が全體どんな心持で此んな事を云ふのか、此れか即ち老子道の肝要なところだと云ふ。並の人でわかるものでない。即ち老子の道は虚無で無だから自然に任せる。自分の腹になにかあると吾れから割り出し

て事をするが老子は私に何も無い。故に善惡を越えて何うせうと云ふ様な考はない。それが却つて能く治るのであると一層上のコトを云ふた。

第二十八章 主意言聖人以無御有故不背萬物之自然

知其雄守其雌爲天下谿爲天下谿常德不離復販於嬰兒知其白守其黑爲天下式爲天下式常德不忒知其榮守其辱爲天下谷爲天下谷常德乃足復販於樸

第一節 三疊言聖人以無爲本

樸散則爲器聖人用之則爲官長故大制不割

第二節 言御有以自然子曰君子不器亦與之畧同

講義

此の章は老子流の聖人は無を元にして世にある物を使ふ。自分に物があると却つて物が使へない。自分に物がないと世の有形物を使ふことが出来る。長短高下其のまゝに安んじ治める事が出来ると申す。

第一節 無を元にしてゐることを三つ並べて言ふた。先づ動物を見ても雄があり雌がある雄をよいと思はずに雌をよいと思ふて守る。雌は何んでも物の先きに立たないでひかじめにするだから

雌がよいと云ふ。老子の三寶には何でも先き立たない事を第一にしてゐる。天下には高い山もあり低い谷もある。天下の一番高い處の谷にゐると其の人の定つた徳が身をはなれない。高いところ程あぶない。尙徳に離れずにゐると嬰兒とて無我無欲無知の場合に戻つて了ふ。高い處へのぼるは危険先づ元へ戻るが第一だと云ふ此れも無を元にすることを變へて云ふたにすぎぬ。世の中には白と黒とがあるが其の白い方をよくせ様とはしないで黒い方のものを守る。是れは韓非子にもあるが外から内を見様とすると却つて見へない内から外を見るとよくわかる。それで黒い暗い處を守つてゐる。そうすると天下中のものがそれを則とし法とする。天下の法になる様になれば自分の常德たがはない。そこでつまり無極に戻つて了ふ。榮もあり辱もあるが榮譽の外へゆこうとしないて却つて辱を甘じて受けてゐる。だからして天下の谷なる様な

ものだ。谷へは何物も擇らばずに流れ込む。けれども其れが却つてよい。そうすれば常然の徳は自ら其處に現はれて樸と虚無自然の道に復飯して了ふ。撲だの嬰兒だの無極だのと云ふはまあ虚無自然の道をなぞらへて言ふたに外ならぬ。

第二節 是れから虚無を元にして有形のものを使ふ事が出来るそれは自然を使ふてゆくので其の効用を云ふ。撲上にあるから撲だけのことを云ふて外のものはない。樸は切たるまゝの木でそれが本で色々の物になる。それ故に自分に器用を出してはいけないと申す。自らなすまゝに任すれば出来形に由つて盡く自ら其の主になる事が出来る。漢の高祖は誠に撲直な人て器用がなかつた器用がなかつたがら却つて四傑をもちひ多くの兵をも使ふ事が出来た自分が一木偶であるから却つてよかつた皆其の明を襲ると云ふ手段であつた。上にあるものは少智を出してはいけない。先き

に立つ者は大きな事をし得ないと云ふ。大制……自然に従つてきまりをすることはそれは無理にきりもりをせよふとするのではない。莊子にもあるが庖丁と云ふ男が牛の料理をする、それは自然の肉脈に由つて丁を入れてゆくからよいので大制で禹が大水を治めるにも水の流れにかんがみて下へくと道をつけて行つたから大水が治つた丁度其れと同じ、孟子にも事なきところにやるとあるが都合見ずに無理をするのは不自然と云ふのでそれをよく知つてじつとしていれば上に立つ事が出来る。孫子は勝ちやすきを勝つと云ふて敵の際に乗じて撃つてゆく。だから勝てる別に無理をするのでも何んでもない。こちらが虚でいて別に敵の頭を打たんの胸をつかんのときめるのもなんでもない彼の隙をあて、打ち込む丈けてある。君子は器ならずとあるやはりこゝらあたりの事で自分にいくせあつてはよくないと云ふのである。

第二十九章 聖人治天下從天下之自然去其太甚耳

將欲取天下而爲之吾見其不得已。天下神器不可爲也。爲者敗之。執者失之。

第一節 以人力不可治天下

故物或行或隨或歔或吹或強或羸或挫或隳是以聖人去甚去奢去泰。

第二節 言聖人從物之自然去其甚

講義

聖人が天下を治めると云ふものは天下の自然に従ふてそこなはない様にしてゆけばよいと云ふ。して自然に過不及がある場合人はそれを補ふてゆくばかり。草木であらうが何んであらうが人間業では生やす事は出来ない。只天然に出来たならばそれを少し加減すればよいのである。それを知らずに人間で出来たものだと思ふと無理をする様になる。

第一節 今日聖人が天下を取つて之を治め様と將欲とヒドク欲する者はたいげて治めたくはないが人が治めてくれと云ふから已むを得ずに治める。已むを得ざるに爲すと云ふ事が老子の大切なところである。已むを得ない場合でないのを手を出してするわざとする事になる。聖人はこんな所をよく氣をつける。元來天下は自然の神が作った神器だから之れを人間の力で治め様と思つたとて治められるものでない。之れを治むるものは却つて敗り。執

る者即ち手ににぎつてはなさない者は却つて失ふ様になる。人がいつまでもつかまへさしてはおかぬ。自然に人が服せぬ様になり人心かそむく様になると云ふ事を前に言つておく。全體の人民がどうぞ天下を治めて下さいと頭を下げて懇願してくる様になつて始めて已むを得ずして治めるのが老子流のやりかだである、人力ではとても天下は治まるものでないと云ふ事を申しておく。

第二節 前の様だと聖人は手を拱ねき乍ら何もせないかと云ふに仲々そうでない上の一節を受けて其れ故に天地間の萬物は自然にこうなるものであることを云ふておく、先きへ行く者があると後からついてゆく者がある。獸を古書には噤とあるつむぐのて或は息を吹き出し或は吸ひ入れることもある又強もあり弱もある此の挫と云ふ字も培になつてゐる本があるが是非とも培にした方を取らねばならぬ。春になると獨り手に天地が物を養ふ、又養ふ丈けて

はいかぬ。秋になると凋落させる。天と云ふ者は元來生きたもので其の仕事をする中にも過不及がある。それを人が捕ふてゆかねばならぬ。そこで人は甚だすぎた事をせぬ様に又は出すことをせぬ様に多い所は、之れを去り少しの所へは足してゆく。天地も過不及なしとは云へぬ。風かあり雨があつて物が調ふがそれが過不及があつて大風や大雨をよこす。其の時には人が幾分手を出してよい様にするのである。それか人間のす可き事であると。そこで今日科學も發達して天地をあざむく計りになつてきたがやはり天地の大法を動かす事は出事ない。人は矢計りそれをうまく利用するまである。荀子の中にも、明達天地を用ゆとあるが全く此の事を云ふたのである。

第三十章 聖人用兵在不得已果決凝滯而已

不務其強

以道佐人主者不以兵強天下。其事好還。師之所處。荊棘生焉。大軍之後。必有凶年。

第一節 言強兵之害

善者果而已。不敢以取強。果而勿矜。果而勿伐。果而勿驕。果而不得已。果而勿強。

第二節 言善用兵者取果而不取強

壯則老。是謂不道。不道早已。

第三節 言強壯之害

講義

此の章は兵を用ゆる事を云ふ其の兵の用ひ方は少し普通とは違ふ、好んでするてなく已むを得ざるにするので。と云ふのは物と云ふものはもつれてくる其の時は果斷てたちきるかどうかせねば紛れが解けない。と云ふ時に初めて兵を用ゆるものであると云ふ事を申す。

第一節 兵の強いことばかりを尊び自慢する様になると却つて害のあることを云ふ。そこで老子中の人たるものが自然の物を以て人主を佐けるは兵を以て天下中に一番強いとほこらない。なぜそれをしないと云ふとそれをするとなと云ふは妙なもので只強かつて弱い者をいぢめ様とするといつくりかかつてそれをいぢめる。

つまり還すことを好む。返報をする。此れ天のするところ天道は自然に之れをするを好むもので。次に一寸した證をあげる。始終戦をして陣を張つてゐるところには荆棘生ずて大事なく、五穀は生じないで何にも役に立たないばらなぞが生ずる。やはり之れは返すを好むもので人民は困難する。又大軍の後には凶年ありて此れも其の通りて必ずこまる事になる。

そこで兵が天下に強いと云ふことを目的にしてはならぬ。

第二節 よく兵を用ふる者は只果決するのみ是れが目的。果と云ふは物が滞つてゐるものを一すじにさりひらいて了ふので兩方がひずみ合ふては事が出来ない。勝負がつけば争はやまつて了ふ國と國との戦も皆そうだ。

第三節 強を張るために兵を用ゆるてはないほこるな必ず返しがくると云ふことを申す。果は已むを得ざるにするので強ひてす

るのではなす。

第四節 あまり強すぎると害があるから別して兵事は強かる事をよろこんではならない。なんでも物はいつまでも盛んに居るものでない。壯であると思ふとはや老と年かよつてくる様になる。是れを年の寄らぬ様などと思ふは不自然で不道と云ふものである

第三十一章 主意言兵凶器非不得已則不可

用

夫佳兵者不祥之器、物或惡之、故有道者不處。君子居則貴左、用兵則貴右。

第一節 言兵之不祥

兵者不祥之器、非君子之器、不得已而用之、恬惓爲上、勝而不美、而美之者是樂殺人。夫樂殺人者、則不可以得志於天下矣。

第二節 言用兵在不得已好之不可得天下

吉事尚左、凶事尚右、偏將軍居左、上將軍居右、言以喪禮處之、殺人之衆、以哀悲泣之、戰勝以喪禮處之。

第三節 詳言兵之不祥

講義

兵はきれものの事昔し人をころすときに人を兵せんとすと云つ

た。兵は不吉のもので不祥の物だから已むを得ざるにせと申す。できものが出来て初めてやむを得ず兵を用ゆるのである。

第一節 兵は不吉なものでめてたいものでないと申す。兵を好むものは：不祥之器の二字は衍文でない方がよい、兵を用ゆるは不祥也てよろしい、そこで物—人物、人がと云ふと、なじ、人が之れをにくむ道を保つものは兵の場合にはあらぬ、君子たる人は平生居れば左の方を貴ぶ。左は陽氣としたものだ。陽氣は物を育てるものだが、只兵の時は陰の人を殺す方の右を貴ぶ。兵を用ひて殺さなければ、埒があかないからどうでも戦はせなければならぬ。兵時はわざわざ席をかへる。是れ兵は不祥だと申すのである。

第二節 兵は不祥の器で好んでやらうとするのとつひに天下を得ることは出来ない。君子は生きる事を好むのだが、兵は君子の器でないものである。だからそれを用ゆるにはやむを得ずに用ゆ。そ

こて恬懐と兵へこり固まらず兵を用ゆるにも心は恬懐である、これが一番よい勝てそれを美とほこらないし、かりに勝つた勝つたところものは人を殺す事を樂しむもの、だ人を殺すことを面白がつてやる人、此の人と心を共にして天下を取らうとする事は不可能で、孟子にも天下を生かそうとする人は天下を一にする事か出来ると云ふてあるが其の通りである。

第三節 兵は不祥であるからめつたにやるものでないと云ふ事を申す。吉事は何んでも左をよいとする、不吉な事には右を尙ぶ。偏將軍は平生の上席。上將軍は平生の下席にゐる。平生とかへてある其うする心持は喪禮を以て之れを處置するので人をころすこと多ければ哀悲を以て泣く。戦かてば忌中の禮を以て之れに居るつまり兵は決してめてたいものでない。しかし果のめ爲には用ひねばならぬと云ふ事にとす。

第三十二章 王侯守無名之道天下自歸之
道常無名撲雖小天下莫能臣也。侯王若能守
之萬物將自賓。

第一節 言守無名之道天下自來賓是主意
相合以降甘露民莫之令而自均。

第二節 言天人一理皆貴自然自然則無名
之道也。

始制有名名亦既有夫亦將知止知止所以不
殆。

第三節 言天下不可無名知名之止則不殆。

譬道之在天下猶川谷之於江海

第四節 比喻結主意。

猶川谷之於江海按言道不求于天下天下自歸于道
故王侯守無名之道。川谷喻天下江海喻道。

講義

此の章は王侯たるものが無名の道を守つて治めさへすれば天下
が自然に皈服すると云ふことを申す。

第一節 此れが即ち主意でさて道と云ふ者は常になんとも名の
つけ様がない虚無な者である。まづそらいふて置く、此れは譬で撲
と云ふ者は切ればなしの木で虚無にたとへて云ふ。

臣とするなしとするは使ひ手がなないと云ふと同じである、そこで撲

と無名な素樸な道を以ておると誰れも取り用ゆるものがないそれが妙な者で机だとか箱とかに定つてしまへば人が使ふが撲は使ひ用かない、上たる人がよく此の無名の道を守らば萬物は使ふことはせず自ら萬物の方から客となつて飯服してくと申す。

妙な者で賓となつてやつてくると主意をかゝげておく。

第二節 人も天も道理は一つだと申す。それが皆自然を尊ぶので自然が即ち無名の道で天地は自然に相合して甘露を下す。是れ天地自然に相合するので上から無理に命令を下すのではない。此れ上にある者の自然の道を持ち守つて居られるの徳で下は自らよく平かに均しく露を受けて治まる。

第三節 前にはもと無名を撲て使ひ様のないものだと言ふたがそれがそれで終るものでないダンダンと道具になる。是れも自然でそれが又なくなつて了ふ時もくる初めて制すれば名ありて柱と

か楹とかに作ると名がてゝくる。かく名も亦己にあるのだがしかし其の名も亦やまることがあるそれを知るがよい。幾らでもないつまでもあると思ふとまぢがひ。そんなに持續するものでない。有るものはなくなるものだと言ふ事を知るが第一で此れ世に居て殆くないわけてある。是れをよく知らなければいかんと申す。

第四節 前へもどつて無名の道の尊きことを申すどうでも其の方へ飯服してゆくことをたとへて申すと川や谷と云ふ者は湖水や海に落ちてゆくもので何もかも無名の大道に落ちこんで了ふ。故に王侯たるものは此の無名の大道を持つておれば天下は自づと治まると云ふので一節の主意に結ぶのだ。

第三十三章 主意言用力於己之利蓋與吾儒

爲己而不爲人之學同

知人智、自知者明。

第一節 自省之事

勝人者有力、自勝者強。

第二節 克己之事

知足者富。

第三節 如衛公子荆居室是也。

強行者有志。

第四節 「易」曰「自彊不易」戴記「斃而後已」之事

不失其所者久。

第五節 大學知止之事。

死而不亡者壽。

第六節 死而道德存者上也。功名存者其次也。子孫繼續又其次也。皆可謂壽矣。

講義

力を己れに用ゆるが一番よいと云ふ。學は人のためにするものではない、こゝでも丁度儒の方で云ふのと同じことを云ふ。各自皆己れがためにすると云ふことを申した。

第一節 自らかへり見るが一番。さて人を知る者は知者であると共に自ら知るは明である知者よりも明者にならんければいかんと申す。

第二節 此れも自分のためになる事と云ふ。孟子にもある北宮黝孟之舎は人と戦つてまけない、一時の力はあるが血氣の勇である

然しまだ其の上の勇がある。自分に自分のわるい事に克つは餘程
 むづかしい。孟子にもある、自らかへそうしてやましからざれば千
 萬人と雖も吾れゆかん、此れはほんとは強いと云ふので一時の勇氣
 とは違つてどこまでも天下の萬事に當つて行く事が出来る。これ
 が大勇である。足るを知るものは富む。是れは名言で幾ら金があ
 つたと不足に思つてゐたのでは心から富んだのではない。何んて
 も足ることを知るのが一家の富である人の欲は限りがない、あくせ
 くして苦むそれよりは是れてよいと自らきめるが眞の富である。
 富は物の多少できまるものではない。ゆたかに不足のないことを
 云ふ。

第三節 是れは勉強する事を云ふのであるがとかく生きた者は
 勉強せねばならぬ。日月は少しも勉強をやめない。其の中に生き
 てゐる人間もそれとあなじにどこまでも事をし遂げ様と云ふ志が

なくてはいけない。易などで自彊息まらずとあるがそれが即ち天行
 健也、てうまいものを食ふてねてゐると病氣になる是れが生きた者
 の自然である、斃れて後にやむとある是れか自然だ。強行とつとめ
 て行ふこれはほんとの志を持つてゐる人で志士仁人と云ふもので
 なければ出来ない。

第四節 物は止まる可きところがある、大學にも止まるを知ると
 ある道理のあるところに乃ちとどまるそれが止る自然、止む可き所
 に止まらなると一生危ない。安心立命が得られぬ。鳥の様な者て
 も止る所に止つて安心してゐる人もそれと同じである、これも自省
 である。

第五節 死んでもそれが亡はない。それが即ち眞實の長壽であ
 る。

第三十四章 主意言道之廣大無邊

大。道。汎。兮。其。可。左。右。萬。物。恃。道。而。生。而。不。辭。功。成。不。名。有。衣。養。萬。物。而。不。爲。主。

第一節 言大道之功能

常無欲可名於小。万物販焉而不爲主。可名爲大。以其終不自爲大。故能成其大。

第二節 言道能立尋常小大之外故眞大。

講義

道はまこと廣大無邊であることを申す。

第一節 其の道のよく大なるを云ふ。さて吾が大道は汎兮としてどこまでもひろくかつ左右と云ふは詩經にもある參差荇菜、左右采之の左右でどちらにもと言ふ意。是れは儒者の方でも合源と云ふと同じである。そう云ふものだによつて此の世の萬物が道を持みにして生きてゐる。其のくらひ皆に恃まれてゐるけれども誰れにても自然に與へてくれる。それが數がきまつてゐる様な窮屈な融通のきかぬものでない。誰れにても一向辭退せぬ。こゝ云ふ風に物を成育して大層な功があるけれ共吾れが生かしてやつた等と云ふ手功の名を得様とはせぬ。だから萬物を衣養と衣を掩ひかぶせる様に自然に成育をしてやる。けれ共自ら主となつてゑばる振舞は少しもない。又無名の道だから主ともなろうはづがない。

第二節 道は廣大無邊なもので大とも小とも云はれない。しかし形體の上に超へているから大なる所以であると申す。そこで大

小と名く可しは普の大小である其大きな上の大が眞の大である。道と申すものは常無欲を本に立て萬物を生成するから萬物何れも其の所を得てくる。それであるからつまり萬物は自然の物に歸服してくる其の中ても大欲をせよとはせぬそれを見ると道は大きなものであるとも云はれる。所が道の方はそうでないそれ丈け大なるものであり乍ら大とはせない一向平氣である、そこでこれが眞の大をなしたと云ふもので大道と云ふて至當である。初の大小は人がつけて見るだけで大小何んと云はうがかまはない。是れが大なる所以である。天地を包んでも包んでも一向大きな顔もしない是れが益々大なる所以を示してゐる。

第三十五章 主意言歸道之効安平大

執大象天下往往而不害安平大

第一節 言歸道之効

大象按日月星雲煙風雨是天象、天象之本是道故稱大象。

藥與餌過客止。道之出口淡乎其無味視之不足見聽之不是聞用之不可既。

第二節 言道本淡泊故効用不盡

講義

第一節 道に歸服すると害はなくよく効能があると申す。見へたり見へなかつたりするもので註にも大象は天象の父母とある

雲煙あれらは皆象て眞の父母とあるつゞり天地を包んで之れを支配してゐるものを大象と云ふ。道があるかないかはわからぬがあるにちがひない。其の一番大きな大象の道を守つてゐれば天下中が自然に治まつて萬物は皆道に歸服してゆく。歸して行つても害せられず安平大とちかけがある。安心して平和で大用て是の位ひ結構な事はなし。

第二節 道の形容、並の様なものでない。極々質樸で淡泊であるが天地を包む効がある。樂と餌とは人のたれてもすくもつて道中の者でも之れを氣付いてうなぎのかばやきの香りや音樂の音でもきくと立ち止つて了ふ。所が道はそうでない。道を口から出したところが味がなし。臭もない見ても見へずきいてもきこへず。樂や餌の方がよいが其れは其の時丈けてなくなるが道は此れを用ひずして盡す事は出来ない。それが妙なもので一寸目についたり一

寸耳にきこえたりする一寸の感を引く様なものは眞の大なる所以てなり。

第三十六章 主意言柔勝剛之利物極則環本

是自然之幾、古人多解此章以兵道權術恐郢書蒸說

將欲歛之必固張之。將欲弱之必固強之。將欲廢之必固興之。將欲奪之必固與之。是謂微明。

第一節 言物剛極必柔、盛極必衰、故以柔侍

剛是幾微之明也。

是謂微明。呂注知幾故曰微明。

柔弱勝剛強。魚不可脱於淵。國之利器不可示人。

第二節 言柔制剛人君治國之利器柔弱勝

剛強按包柔記曰柔能制剛蓋本於此「光武」曰吾欲以柔道理天下亦此意。

講義

此の章は柔が剛に勝つとこれが却つて利益だと申す。即ち柔弱勝剛強と云ふのが主意である。

第一節 物と云ふ者は強よすぎると弱くなる盛んなもの其の通りそこで強よがる事を好まず。じつと柔になつてゐると強にかつことが出来るそれは表へは現れんがかすかに見ゆる道理があるそ

れを知るが幾微の明であると云ふことを申す。先づ之をおさめてずつとちりめて了ふ。將欲はひどくそれを願ふことなんでも之れはずつとおさめてしまはんとすると頭からおさへねばならぬ。それで強ひやひに張らせておけばきつと弱つてくる。又之れを弱めんとすれば先づ之れを強ばらせねばいかぬ。すぐしてはいかぬ。強くなるだけなるときつと弱くなつて了ふ。之れをやめて了ふとすれば先づ起きる丈けおして了ふとどうでも癢せられずにはおらぬ。之れを奪はんとするには先づ與へておかねばならぬ。管子にも與ふるの取るたる云々とあるが此處から出てくる。此の道理を悟るを幾微の明を知ると云ふ智の深い人はなんでもそれがわかる勢のよい極點になつた時にはさつとあとさがりするので其の時をまつてつき込んでゆけばよい。

第二節 柔軟は剛強にかつ事を申す。弱いと強よいものを制す

る事が出来る。と云ふ主意を申す。こちらは幾微が見へるのでつきこんでゆく、柔弱は剛強に勝つ事が出来る、幾微を見てかゝりさへすれば充分弱いものにかてる、これは一寸たとへ、を云ふ、下の句を起す虚無を學ぶだからして軟かな方を尊ぶ物が無いとあるものにかてる、と云ふと道理はあなじだ、そこて是れは誠に人君などの天下を保つたりするには極大事なるものである。魚は淵を脱す可らずとび出せば死んで了ふ國を保つ者は柔をいではいけない。柔を守つてゐると却つて天下をあさまる。そこて柔軟は國を治める良器である然し之れは智がふかくなるとわからぬので人には示す可らずまぢがへると大きにあやまりが出来る。人君が自分を虚にする事は大事なことだが何んでも腹にはいろいろな事を抱いてゐても人には見せぬがよいと云ふ。

老子の道は何んでもそれではない此の事を漢の孝武皇帝はよく

わかつたものだと思へ吾れは柔道を以て天下を治めんと欲すと云はれたが是れをよく悟つてゐられる、柔て以て剛を押へるが一番、是れは人にみだりに教へるとあやまりが生ずる故にみだりに人に示す可らずと云ふた。こゝは説き様でわるい術の様に思ふが全く悪るだくみの様にきこへるのであやまりやよい。物は極に至ると元へ戻る心から云ふたので只それまでのことである、決して權謀術數ではなす。

第三十七章 主意言聖人以無爲鎮靜天下動

作

道常無爲而無不爲。

第一節 先掲道之体用常無爲体也。無不爲

用也。

侯王若能守之。万物將自化。化而欲作。吾將鎮之以無名之樸。無名之樸。夫亦將無欲。不欲以靜天下。將自定。

第二節 言以無爲靜樸鎮万物。

講義

是れは聖人は無爲を以て天下の動く者をしてしづめる事を云ふ。先きの柔を以て剛を制するもおなじである。と申す。

第二節 道の體用を云ふ。常無爲か體て本てなさざるなしが用てはたらき。道は常になにもするものではない。それが體、しかし何もなさない様だがなんでもはたらいする。なんでもすると云ふ

のは拱手してせないではない、自然まかせにしてせ、つかからぬと云ふ時にすればそれは自然にするのでそれをなさざるなしと云ふなんにも食はないが自然にほしくなりあ食ふが常無爲。食はんで食ひ。爲さずして爲す。それは自然に任せると云ふことになる。ついで老莊の道をあやまつて考へ、手を拱いて何んにもしないが道であると思ふのはまちがひである。

第二節 其の前に無爲を云ふておいて動とはたらいしてゐる者を鎮めることが出来ると云ふ。天子は萬民の上に立つそう云ふ人はよく此の道を守つてゐれば下も自然に治まり化せられるのである。が化したところて靜にしてゐられづめてはいけない靜に化してはゐるけれどもやはり動く。そこで上にゐて其の動くのをしづめる。それをするには唯、無名の樸を守りそれを持つてゐれば自然にしづめることができる。

第三節 無名無欲となるそれが善いと云ふ事を申す、自然にまかせて静樸の所であれば天下も其の静になる。上のするところ下必ず之れに習ふ、王侯たる人が静を守つてゐるとこんな効能があると云ふことを申す。

下 篇 按 下 編 專 論 德。

第三十八章 主意言德以下趨薄不若道之厚

上德不德是以有德。下德不失德是以無德。上德無爲而無以爲。下德爲之而有以爲。上仁爲之而無以爲。上義爲之而有以爲。上禮爲之而莫之應則攘臂而扔之。

第一節 言道德功用

故失道而後德。失德而後仁。失仁而後義。失義而後禮。

第二節 言道德下趨順序。

故失道而後德云々。楊子法言曰：老子之言道德，吾有取焉耳。及槌提仁義，絕滅禮學，吾無取焉耳。按老子非槌滅仁義禮學，恐眞涉人爲耳。楊子拘字而不解眞意。夫禮者，忠信之薄，而亂之首。前識者，道之華，而愚之始。是以大丈夫處其厚，不居其薄，處其實，不居其華，故去彼取此。

第三節 言道德得失

前識者，道之華，而愚之始。按大知不知，故知之愚之始。又按前識先事而識，幾也。即智也。處其厚，處其實，厚實皆指道也。薄者指華指識。

講 義

老子を道德經と云ふのはなぜかと云へば、初め上篇の方には道とす可きは常道にあらずとて、専ら道に就て説き、そこで下篇になると常徳は徳ありとせずとて徳から説いてゆく。此の所からして道德經と云ふ名をつけたのだ。けれ共篇む者もいづれこう云ふ風に考へた事だらう。但し前々に詳しく言ふた通り、老子の道德と云ふは道も徳も自然に反かない所を言ふので、自然の道は天地を抱いて大なるもの。天地は自然の道から生れて出たものだから、第一に自然の道を天地はもらつて萬物を成育する。其の萬物を成育するの^のも自然。自然の道を自然の道として持つてゐると、これが自然の徳。徳は得也てひらつてゐるが自分の徳だ。儒者は學問ては仁義を云ふ。それは萬人互にやらねばならぬ事てそれで道と云ひ、これを自分のものとして得てもつてゐるを徳と云ふ。徳となつてからだ

んだんに薄くなつて下つてゆく徳から次へ次へと岐れると益々うすくなる。そこで元の道を忘れてはいかぬと元へかへつて見て。元は自然の手厚い道でそれを忘れてはならぬと云ふ。厚い道がうすれると云ふも實は自然ではあるが本を忘れない様にせねばならぬ。

第一節 上徳下徳はどんな働きをするものかといふことを申す其のよい徳といふものは徳としない自然の其の徳を得てあるものだそれがあれば徳があるとするとそれは已に下徳で徳があると何んともしないのが上徳で此の自然の徳を失ふてはならぬと始終氣にかけてゐる。是れを以てほんとの自然の徳を失ふてくる。上徳は何んとも思はぬ。下徳は自分の考を用ひ力を用ひているこゝう云ふわけで上徳下徳のわけを説いた。そこで前に言ふた上徳はなす氣はないがせぬと云ふ事はない。又下徳は之れは人のなす可

き徳だからとて略言する。人間業でするので自然にするのでないから従つて不自然になる無理をする様になる。

それが下つて徳がいろいろに分れる。先づ最初に分れるそれを仁と名づく。上仁は之れをなすけれ共別段につとめてせよと云ふ事はない自然に出てくるそれで先づ上仁は老子に近い道から出たものだ。孟子にも惻隱の心と云ふ事がある。人が井戸へ落ちそうだと云ふ時に自然に之れを救はんとする心が自然に出てくる。つまり之れを救はんとする心は自然でそれが上仁と云ふのである。それから今度は義と云ふのが出てくる、彼の様にしてよろしい此の様にしてよろしいかと云ふそこから義が出てくる。心をきりもりして仁に従つてゆくが義である。どうしても救ふてやらねばならぬ場合になるが自分の身も懸念せねばならぬ事になる此の場合きりもりをして心の宜ろしきをとる。此れは心あつてするので自然

にするのではない。其れをなすにも心がある決して自然に出来るのではない上仁とは違ふ。今度は禮で。上禮と云ふ。禮は形の上に出て來くるもの。心で善惡をきめて取捨するのが義で禮は其れを身に現はしてくる。あすこに人が見へた尊敬せねばならぬと義が思ふと形がおじぎをする。これか禮である。こちらから禮を折再しても應じて來ない會釋をせねばならぬに會釋をせぬ。すぐに怒つて先方の臂をひつばつてお前も御辭義をせぬてはいかんではないかと云ふ様になり終ひには喧嘩腰になつて争ふ様になる。

第二節 順序を云ふ、即ち道徳、仁、義、禮と云ふ風に下つてくるものであると云ふ、道が一番に本にあるのだがそれがなくなつてつまり物が道を得て徳となり次に人が物を救はんとする様になると仁と云ふものになり次に義、次に禮と云ふ具合に移つてゆく。此の失と云ふ字は大きく見ないで其の次はと云ふ意に見たがよい。

第三節 徳には前に言ふた様に上と下とがある。仁義禮と云ふは已に名かついてくる。是れは其の下徳の方である。上徳を忘れて下徳ばかりになるとつひにとんだ事になる。是れから上徳下徳の得失を云ふのである。禮はもと忠信の誠から出るのだが、けれども形に出るとうすくなつていく。それからして若しや心になくても形に丈け禮をせねばならぬ事になる。それで腹の忠信が外へ出るのでうすくなる。つひに臂をひつばつてもお辭義をさせ様とする様になる。是れだから亂のはじめだと云ふ。まだどうかわからぬ事をそれをそのどうともわからない中に早く知る。知るはよいけれども知れてくると云ふ自然をやぶつて外へ見はす丁度道から花が咲き出た様だ。そこで何か一つ仕様と云ふ風になつてくる此れが愚のはじめだ。人がどこまでも前へ前へと知つてゆくことは出來ない。此んな風な妙な事を云ふのは前識と云ふ様な小知て

なくともつと大きな知を知らなければならぬと云ふのだ。

大知は知らず……なるほど本を知ると云ふ事は出来ないがそれを知るのがつまり大智である。なんでも形のあるものだけは知れる空気が人でも知れるそれは空気の形象があるから。何んでも知ると云ふのが馬鹿のはじめだと云ふダン／＼末になるほど悪くなるつてくる。此のわけを以て大丈夫は元の深い徳にゐてうすい仁義の禮智にはあらず。其の實質に居て徳から出た花の咲いた知識などにはあらず。そこで末を去つて本の自然の道を取り守つてとりはづさない様にしてゐる。元は一つでわかれてくるも自然だがそれがだん／＼本を忘れて了ふ。老莊は仁義禮智をせないでよいとは云はないせなくてならぬ時に始めてせよと云ふ。仁義禮智でも本は自然から出たものだ。それが其の本を忘れてはならぬと申す。

第三十九章 主意言万物貴一 一即虚無自然之道。

昔之得_一者、天得_一、以清、地得_一、以寧、神得_一、以靈、谷得_一、以盈、万物得_一、以生、侯王得_一、以爲天下貞。

第一節 言物皆成于一

昔之得一者、蘇註一者道也。按此一句是綱。天得一以下六句是目。一即自然之道。

講義

其致之天無以清。將恐裂。地無以寧。將恐發。神無以靈。將恐歇。谷無以盈。將恐謁。万物無以生。將恐滅。侯王無以貴。高將恐蹙。

第二節 言物無一則敗。是反說。

故貴以賤爲本。高以下爲基。是以侯王自謂孤寡不穀。此非以賤爲本耶。非乎。故致數譽無譽。不欲珠玉。如石。如石。如石。

第三節 歸入人事。

致數譽無譽。改正一作與。按與本無。人造爲有。故分盡。

其器械則飯無。

珞々如石。攷正珞々一作落落。按玉石謂有形。

講義

萬物は一を學ぶと云ふ事を云ふのであるが其の一は何かと云ふとやはり虚無自然の道と云ふ事だ。是れを一番に貴しとするものである。

第一節 萬物は一によつて生ずると云ふ其の一から出来るから貴いと云ふ昔之と云ふは昔はひろい語であつてすぐ先きのことも太初の事も乃至は奇妙な事も昔と云ふ。こゝは初めと云ふ義で物にはじめ一を得て出来るものである。註に昔は初也とある。一以前の事は何んでも皆はじめであるからである。あの天は一番大きいそして高いものであるが自然の道と云ふものから出来たか

らあんなに清よい空の形のないところが皆天地は又一の自然の道と云ふものを得てゐるものだからやすい。萬物をのせて平氣で居る地は動くが何もあちるものがない是れ自然を得てゐるから物をのせてやすいのである。又神……陰陽變化計られざるものを稱して神と云ふ。此れも自然の一の道を得てゐるから不思議な靈妙なはたらきをする。又谷と云ふのも其の一を得て自然に凹いのかから凹いところに水でも何んでも一杯にみつる。大きな物を云へば今云ふそんなものであるがいづれも自然を得てゐるから生きてゐられる。其の萬物の頭となつてゐるものにも一と云ふ自然の道を得ておらねば天下第一の正しいことをする事は出來ない。自然から出るからして正しい。故に天下萬民が歸服するので侯王とあがめられてゐるのである。何んでも一と自然の道を得ておらねばならぬと云ふ事を云ふておく。

第二節 是は前の説の裏を云ふ、これを反説と云ふ、一がないとながもちがしないと云ふ。其の家は上の天とか地とか神とか萬物とかを指して云ふ。之の字は清、寧、靈、貞等の六つを之と云ふた。此の六のものを招き出すはどうだと云ふ。致はきはめると云ふこと、これをこちらへあしきはめるから致と云ふ、自分の方へあしきはめ様とするには。古書は言が簡であるから少し言をたさないとわからぬが。皆それぞれに天が一を興へてゐないと云ふときは天は清ひことはない、そうした時には天が裂け様も知れん、たゞこしらへた事てしばらく清くしてゐたてはさけてしまふ。一の自然の道があるから自然にきよいのでいつまでも裂けると云ふ事はない。地も其の通りである。

神も一を用ひん時には不思議な靈妙な事はない谷と云ふも一を得ない時には水ができて了ふ充つることが出來ない。欠けて了ふ

かも知れない。それを氣使ふ。侯王も一を得ない時にはいつまでも尊いと云ふ事はない。つまづきはすまいかとおそれる。天地はなんでも自然を保たないと長もちはしないと云ふ前の説をうらから言ふた。

第三節 前はたゞ天地間の一體のことについて道理を云ふたがここは其れを一つ人間の上にあてゝ申す。故に尊いと云ふものはじめから尊いではない。もといやしいものがあるから。又高いものがあると云ふけれども下からだんだん上つていつて高くなつたいやしいものがないては貴いものはない。ひくいものがないては高いものはない。すると低いやしいが本となる。此の故に侯王は私かと云ふ事を孤寡不穀と云はれる。自ら卑下しいやしんで云はれる。上の非の字は一本にはない。或る本には其の字になつてゐるがある。私は其の方がよいと思ふ。其は侯王を指す、侯王は賤

を本とするではないか。うんそうであると思ふ。御自身からいやしい様に云はれる。此の道理は何んでもないところが元であると思ふ。高いと云ふもないところから高くなつたないものをいやしいとする。一が其れが基て無が即ち自然である。

第四節 譽ては通じない、輿の字の方がよい、事を一一にかぞへつてくしてしまふと車はなくなつてしまふ。此れは作つたものだしまひにはなくなつてしまふ。それであるから無が第一で無と云ふものを學ぶものだ。吾が道を守るものは珠々として石の如く珞々としてその如く形のある様に固つたのは欲しのぞまない。無が一番尊いので無と云ふ自然からだんだん形が出てくる。萬物は無いと思ふものをたてとしてそれから出てくる。故に其の無即ち一を忘れてはならぬと思ふことを申した。

第四十章 主意言無者万有之本。猶言反弱者
動用之本原

反者道之動。弱者道之用。

第一節 以反弱明道之無

反者道之動弱者道之用「翼註」反復也。按反復于無也
往而不反則非活動之道。動用一意互文耳。

天下万物生於有有生於無

第二節 一章之主意

講義

此れは其の無があつて有と云ふが出来てくる事を申す。だから
ないものが本だと云ふ。

第一節 反はあるもの、方から云ふ。いつまでもあるものではない又元へ戻つてゆく。此れを反と云ふ。人間と云ふ形があつても又元へ戻つてないものになるに相違ない。ない様になつては自然の道が動くのだ。弱と云ふものはやはりないものを云ふ。風や水は極めて弱いもので役に立たない様に思ふがやはり大用をするもので皆んなの知つてゐる通りである。弱くなつたり強くなつたりするのは道の用である。そこで反弱は道の用と解すればよくわかる。ないと思ふがまぢがひ。いつまでもないては續かぬ。又弱いばかりではゐない反り反りて動いてくるものである。

第二節 今日天下の萬物を見ると形のあるものが無から出来た天地と云ふも無から出来たに相違ないやはり無にちがひない、どう

して出来たかと云ふとやはり自然の一から獨り手に出来たと云ふより外に仕方がない。こんなには有から無無から有と相生じ相連つてくると申す。

第四十一章 主意言道無名而善成万物。

上士聞道勤而行之。中士聞道若存若亡。下士聞道大笑之。不笑不足以爲道。故建言有之。明道若昧。進道若退。夷道若類。上德若谷。太白若辱。廣德若不足。建德若偷。質真若渝。大方無隅。大器晚成。大音希聲。大象無形。

第一節 說聞道三品之人。

道隱無名。夫唯道善貸且成。

第三節 言道本無名故凡眼不知之而無名是所以成万物。

道隱無名。按道自然而無形無形何會有名。道善貸且成。按言貸與道千万物且成就万物。

講義

自然の道と云ふは名のつけ様がないしかし無だから萬物をこしらへ出す、こう云ふ又道理を云ふ。

第一節 此の道理を云ふてきかせて其れをきくに人に三品あることを云ふ。上士はチャンと生れつきがよいから道理がぢきにわかり、道をきくと結構なものだとすぐ信じて其の道を行ふ。これはまことに聰明な人でぢきに道がわかる。わかるから行ふ。註に有

志とあるが志は道に志すと云ふこと論語にも志士仁人云々とある然るところ此の頃俗に有志者などつまりぬ事に志を用いてゐる之れは決して漢文などをかゝるときに用ゆる文句ではない。中士はわかる事もありわからぬ事もある。有するが如くする。有するが如く行ふ事もあり失するが如く行はぬ事もある。折々は道を行ふ事があるが折々やめる。論にも日に月に到るとあるがまあ此んな風の人を事を云ふのである。かゝる人を中士と云ふ。下士になるとどうもわからぬ。だから何も知らずに大いに笑ふ。そこで下の方が笑ふてくれる様でなければ眞の道でないと大きな事を云ふ韓退之が四六文流行の時代にひとり古文を以てそしりを受けてゐたが自分はやはりそしりを得意としてゐた様だ、世間のものは知らないで笑ふてゐる。笑はれるがあたりまへであると申す。此れはつまり凡眼の人には道の見えなことを云ふのである。建言とは

初めて新たに云ふこと、建言建白なぞと云ふて獨り建て、云ふことを申す、古人の建言に此ふ様な事がある。之は下の文句を指す。

第二節 明道は凡人から見ると暗い様に見つる進道は却つて退く様に見つる、眞の道は平坦だがそれか土、ぐれの様に見つる。こんな平安な道はないと云ふたつてわからないから塊の様に思ふてゐる。實に一番よい徳であるけれども之れが實にひくい谷底のつまりらぬところの様に見つる。太白と白い深い道であるけれども却つて汚辱の様に見へる。廣徳も凡から見ればつまりない足りないかの如く見へるが如く大方とかどのある道は隅のない様に凡服からは見へる。大きな器はよく出来る。凡人から見るとぐずぐずしてゐる様に見へる。大なるよい音聲は聲がしない。後世になるとます／＼音が複雑になつてくる。大象は却つて形のない如くに見へる。